

T · T 独立艦隊海戦譜

瑞穂国

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の海を席卷する謎の艦艇群・深海棲艦。

それに対抗しうる唯一の存在・青い海の戦艦。

青い海の戦艦を操る、艦艇の記憶を持った少女たち・艦娘。

これは、彼女たちと、彼女たちの指揮官・提督の、奮戦の記録――

通称Z海域と呼ばれる魔の海域。深海棲艦の勢力が強大なこの海域には、例えばBOBであっても、接近することは許されない。

そんなZ海域に、秘密裏に創設されたタウイタウイ泊地。ここには、特殊な艦娘たちが集っている。 “本来存在しない”はずの彼女たちと、彼女たちを統べる少女提督・磯崎舞が目指すのは――深海棲艦の起源に迫る、“イレギュラー”と呼ばれる深海棲艦たち。

誰にも語られることのない、『T・T独立艦隊』の戦いが始まる。

※連動作品もよろしくお願ひします

「パラオの曙」

「Eの海」

「欧州激戦録」

「戦海の守護者たち」

目次

あるべき海	1
あるべき艦	9
来たる朝陽	17
鉄鯨の飛沫	25
極秘の依頼	33
双鶴の饗宴	40
銀翼を低く	47
巨砲咆哮す	54
異端者たち	61
決断を下す	69
トラック沖	73
砲弾の乱舞	80
コマツグミ	87
深くなる謎	94
深海の覇者	102
閉海の姫君	109

あるべき海

海面は、漆黒の闇に包まれていた。

今晩は新月。およそ一ヶ月で地球の周りを一周する忠実な衛星は、それに合わせて満ち欠けを繰り返す。今、その月は完全に姿を隠しており、海上は見えぬ水平線まで真っ黒だった。

ただし、それは視覚だけに限った話だ。窒素と酸素を主成分とする地球の気は、昼間よりもほんの少し劣るものの、やはり三百メートル毎秒超という速度で音の波を伝え、視覚の代わりに彼女の聴覚を満たした。

磯崎舞特務大尉。深い紺の第一種軍装に、不釣り合いなキャップ帽を被った少女は、訳あって十六歳の若さで艦隊を預かっていた。

夜戦仕様で照明を落としている艦橋内に響くのは、遠くで波が切れる音、轟々と唸る機関の音、煙突から立ち上る蒸気の乾いた音、そして自分ともう一人の息遣い。『相棒』の存在を側に感じて安心したものの、やっぱりその姿がうつすらとしか見えぬ、溜め息を吐いて、意味もなく双眼鏡を覗き込んだ。

もちろん、何も見えなかったわけだが。

「もう、何にも見えないじゃん」

ついに文句を言い出した彼女に、艦の主はクツクツと押し殺した笑いを漏らした。

「当然だって、提督は夜間見張り員の訓練を受けたわけじゃないんだから」

「むー」

かつての海軍が誇った『超能力』集団を引き合いに出され、舞は頬を膨らます。彼らと比べられてはたまらない。

「そういう雲仙は見えてるの?」

「もちろん、見えてません!」

暗闇の中でも、満面の笑みであることがありありとわかる返事に、舞も力の抜けた苦笑をするしかなかった。雲仙と呼ばれた艦娘は続ける。

「あ、でも電探にはバツチリ映ってるから」
「そういうのは早く言つてよね。それで？」

雲仙は確かめるように目を瞑つて、額に人指し指を当てる。

「えっとね……。戦艦一、巡洋艦二、駆逐艦三。かな？」

「かなつてなによ、かなつて……。ま、いつか。今回もさつさと片づけちゃお」

あつさりと言う舞に、雲仙が首を傾げる。

「……。こつちには戦艦がないんだけど？」

「でも、雲仙と鞍馬がいるでしょ？」

「そういうことにおきますか」

舞期待の超巡洋艦娘が、意味ありげに頷くのがわかった。

「鞍馬、聞こえる？」

雲仙が、追隨してくる姉妹艦を呼び出した。彼女からの返事は早い。
い。

『さつきから聞こえてるわよ、姉さん。毎回言ってるけど、ちゃんと通信回線は切つておいて』

「はい、ごめんごめん」

妹艦の注意を軽く受け流して、雲仙が作戦を伝える。

「私は戦艦、鞍馬は巡洋艦、龍風たちは駆逐艦ね」

「……。了解』

『はいよー』

『イエッサー！』

『お任せを』

『合点承知！』

鞍馬に続き、四人の駆逐艦娘が威勢よく返事をする。彼女たちにとつては久しぶりの夜戦だ。血が騒いで仕方がないのだろう。舞自身も、体の火照る感覚を抑えようと深呼吸をした。

——基地の皆には、文句言われそうだなあ。

今回、基地に残してきたのは夜戦好きの面子ばかりだ。某軽巡洋艦とか、某駆逐艦辺りに捕捉されたら最後、間違いなく非難ごうごうコース、下手をすれば半日は解放されないかもしれない。

「いいでしょ？提督」

「もちろん。雲仙に任せる」

律儀な確認に短く返す。イタズラっぽい笑い声の後、機関の音が明らかに高鳴った。

「合戦準備！」

舞が叫ぶ。雲仙経由で電波に乗った彼女の声は後続の五隻にも伝わり、艦隊全体が戦闘準備状態に移行する。雲仙は自らの背負った艤装と精神同調率を高め、艦をいつでも戦闘可能な状態にした。

「第四戦速！鞍馬、着いて来て！」

『了解、姉さん』

「雲仙」はスクリューの回転数を上げる。ペラが水をかく反作用で四万トン超もの艦体を前に押しやり、次第に速力を与えていった。「いつも通り、二万でいい？」

急加速を艦橋のへりに掴まることでやり過ぎた舞が大げさに頷く。衣ずれの音でそれを感じ取ったのだろう雲仙は、同様の指示を鞍馬に飛ばした。

窓の外は、相変わらず黒一色だった。しかしその先に、確かな敵艦の存在を感じて息を呑む。同時に、深海棲艦がこちらに気づいたことも直感した。

——さて、どうするかな？

こちらは速力で圧倒できる。「雲仙」も「鞍馬」も、やろうと思えば並の巡洋艦以上の速力を発揮できるし、後続の「龍風」たちに至っては、実に四〇ノットの速力が出せる。先の機動で、深海棲艦側もそのことはわかったはずだ。とすれば、彼らの取り得る選択肢は、正面からの決戦、あるいは——

「やっぱりね。敵艦隊に動きあり。戦艦以外が分離して、こつちにくるよ」

「囮を使った時間稼ぎ、か。いつも通りね」

雲仙の報告に、半分ほどうんざりして感想を漏らす。律儀にこちらへ向かってくる敵駆逐艦のことを思うと、同情の涙すら浮かんできそ

うだ。

『・・・ねー、テートクー。先に行っちゃダメー?』

第一特設駆逐隊——一特駆の司令駆逐艦娘、龍風が、ねだるような声で促してきた。舞は素早く計算すると、頷いて了承する。

「うん、いいよ。全弾ばら撒いてきちやって」

『わーい、やったー! テートクのお墨付きだー! 一特駆、突撃!』

「敵重巡発砲!」

威勢のいい駆逐艦娘の声と、雲仙の報告が重なる。外に目を遣れば、遠くの方で発砲炎と思しき光が見え、敵重巡を赤々と照らした。二十数秒後、*「雲仙」*たちの上空で照明弾が炸裂した。

彼我の距離は、ざっと見て二万一千ぐらいだろうか。戦艦の方とは、まだ二万五千の開きがある。

『提督、そろそろ始めても?』

自らに割り振られた目標が、決戦距離の二方に近づきつつある鞍馬は、通信機を通して舞に確認を取る。敵戦艦とは離れる方向へと舵を切る四艦隊の位置を思い浮かべ、舞は自ら納得するように大きく首肯した。

「そろそろ頃合いかな。鞍馬、一特駆の娘たちをお願いね?」

『・・・あまり気が進まないけれど、わかったわ』

溜息交じりに返答した鞍馬との通信に、再び駆逐艦娘たちが割り込んできた。

『何? 鞍馬姉さんもやるの?』

『おう、こいつあ負けてらんないねえ!』

『競争だね! 置いてくよ?』

『よろしくお願いいたします、鞍馬さん』

『あなたたち、あまりはしやぎ過ぎないように・・・って、もう! 待ちなさいったらー!』

島風型——究極の艦隊型駆逐艦のみに許された四〇ノットもの速力をフルに活用して、小さき勇者たちはみるみる加速し、*「鞍馬」*、続いて*「雲仙」*を追い抜いていく。それを盛大な溜息と共に見送った鞍馬もまた、自らの艦の速力を上げ、四部隊へと転針する。

舞も雲仙も、笑いをかみ殺すのに必死だった。鞍馬本人は駆逐艦を苦手としているのだが、なぜか龍風たちにはよく懐かれていた。いや、逆に懐かれ過ぎているから、苦手なのかもしれないが。

ともあれ、基本的には心配性で面倒見のいい艦娘だ。彼女からすれば、元気にはしやぎまわる一特駆の娘たちは気になって気になって仕方がないのも事実だろう。だから、舞も雲仙も、心配はしていなかった。

『目標、敵重巡。撃ち方、始めっ！』

「雲仙」の艦橋左側で火焰が踊る。転針の終わった「鞍馬」が、八門のうち四門の砲身をそそり立たせて、発砲したのだ。突撃を敢行する一特駆にとつて、最大の障壁となる敵重巡洋艦に向けて、射弾を浴びせかける。電探による精密射撃を行っているらしく、照明弾の類は確認できなかった。

「こっちも、負けてらんないねえ」

妹の砲撃に触発されたのか、雲仙が呟く。舞はうっすらと笑って、状況についての確認を行った。

「距離は？」

「今二二〇（二万二千メートル）・・・あ、待った。二二〇だ」

「後ちよつと、ね」

「どうする？ちよつと早いけど、撃つちやう？」

「さすがに二万切らないと、電探射撃できないでしょ？」

「それもそっか」

雲仙は少々残念そうにしていた。

次の瞬間、自らを着け狙う艦影に気づいたのか、追尾していた敵戦艦が発砲した。逃走しながらの射撃であるため、精度は悪く、数十秒後に落下してきた砲弾は、明後日の方向に水柱を噴き上げる。それでも、一六インチという圧倒的な暴力を「雲仙」に向けて振るったことに変わりはない。

「下手っぴ、下手っぴ」

が、舞も雲仙も臆することはない。心底楽しそうに雲仙がそう言うのと、距離二万を切るのがほぼ同時、一拍を置いて敵戦艦が第二射を

放った。

「針路二二〇、同航戦に移行して！」

四万トンの「雲仙」は、すぐには針路を変えない。艦体の周りに生じる水流に対して、舵が十分な力を発揮しだすには、それなりの時間が必要だ。結局、敵の第二射が落下してから、「雲仙」は艦首を右に振り出した。

一度舵が利き始めれば、後は早い。すぐに舵を戻し、逃走を図る敵艦と同航戦に移行した。

「最初から斉射でいい？」

電探から得られた射撃諸元に誤差修正を加えながら、雲仙が尋ねる。

「雲仙に任せるよ」

「にしし、それじゃ、遠慮なく」

第三射が落下した。暗がりの中でも、白い水柱が辛うじて確認できる位置に、巨大な海水のオブジェが出来上がる。まだまだ空振りの域だが、精度は確実に向上していた。

「距離よし。方位よし。誤差修正よし。射撃準備よし！」

「目標、敵戦艦。撃ち方、始めっ！」

「撃っ！」

お返しとばかりに、測距の完了した「雲仙」が八門の主砲を奮い立たせ、地獄の炎をその砲口から迸らせた。濡れ雑巾で引っ叩かれたような衝撃と大気を揺るがす轟音が、しばし舞の感覚を支配する。五〇口径という長砲身砲ゆえの高初速を与えられた八発の三六センチ砲弾は、高度数千に達する巨大なアーチを描き、風切り音を引き連れて敵艦の周囲に落下した。こちらから見て、手前に五発、奥に三発。夾叉だ。

「初弾夾叉！惜しい！」

夜戦、それも距離二万で初弾から夾叉という偉業を成し遂げたにもかかわらず、雲仙はそれがさも当たり前のことのように、悔しげに指を鳴らす。

「残念賞」

からかう舞に、雲仙が不満げに頬を膨らますのがわかった。「むー。いいもん、これからボコボコにするんだもん！」

そう宣言するや、雲仙は第二斉射を撃ち出した。先ほどと変わらぬ衝撃が艦橋を震わせ、前部二基四門、後部二基四門の長砲身三六センチ砲が爆炎と鉄塊を吐き出す。大音響とともに空間に放り出されたおよそ八百キログラムの巨弾が、音速の二倍を超える速度で、一気に高空へと昇って行った。

◇

艦艇データファイル01

「雲仙」型超巡洋艦

全長・・・二四六・五メートル

全幅・・・二八・二メートル

排水量・・・三万七六〇〇トン

速力・・・三六ノット

五〇口径三六センチ連装砲四基

六五口径一〇センチ連装高角砲八基

二五ミリ機銃多数

雲仙型は、分類こそ超巡洋艦であるものの、実質的には金剛型の代艦となる高速戦艦である。そのため、米アラスカ級大型巡洋艦とは設計思想が根本的に異なる。大和型、翔鶴型と並び八八八艦隊計画前期の目玉となる本型は、主砲口径こそ三六センチであるものの、高い速射性能で威力をカバーしており、対空・対艦・夜戦の要として機動部隊随伴の役割が期待される。

雲仙

雲仙型一番艦。緩いカールののかかった茶髪を長く伸ばし、巫女服アレンジの服装をまとった少女。深海棲艦の襲撃を受けて遭難した舞と出会う。細かいことは気にしない性格で、いつも鞍馬に窘められる始末。ただし、砲術の腕は本物であり、紀伊もその実力を認めている。甘いものが好き。

鞍馬

雲仙型三番艦。栗色の髪を肩口で揃え、顔の右側の一房だけが長く

前に垂れている。姉が姉だからか、落ち着いた雰囲気を持ち主で、カモミールティーを愛飲する。本人は駆逐艦を苦手としているのだが、彼女たちからはなぜか懐かれてしまっている。バストの雲仙、ヒップの鞍馬。

あるべき艦

砲口から迸った爆炎が収まり、艦上に束の間の静けさが訪れた。長砲身三六センチ砲八門から放たれた砲弾は、計算通りに弾道を描いて飛翔していった。

第二斉射を見送った舞は、そこでニヤリとほくそ笑む。ここからが「雲仙」の本領発揮であることは、彼女が一番よく知っていた。

「次発装填完了！撃つー！」

第二斉射の飛翔中にもかかわらず、早々と「雲仙」の第三斉射が咆哮を上げた。その間隔はわずかに十秒。並の重巡洋艦よりも早い。細い艦体に載せるために、連装にならざるを得なかった新設計の三六センチ砲塔は、代わりに破格の速射性能を手に入れていた。

第二射弾着の水柱が上がるのと、「雲仙」の第四斉射が放たれるのはほとんど同時だった。八つの火球が海面に衝撃波のクレーターを作り出し、その閃光の中に敵戦艦の至近弾が噴き上がる。

「命中！二発！」

雲仙が叫ぶ。

「畳みかけっ……てるね、もう」

「次発装填完了！第五射、撃つー！」

ワンサイドゲームに近かった。鋼鉄の暴風となって吹き付ける三六センチ砲弾に、敵戦艦は為す術もない。もちろん、一六インチ砲艦として自らと同等の砲撃に耐えられる敵戦艦の装甲は、いくら長砲身高初速の三六センチ砲を以ってしても貫通は容易ではない。しかし、バイタルパート以外の比較的装甲の薄い区画をスタボロにするには十分過ぎた。

砲塔型の両用砲が、弾薬庫の誘爆を引き起こして吹き飛ぶ。

太い直立煙突が半分千切れ、黒煙を噴き上げた。

錨鎖庫に飛び込んだ砲弾は艦首に大穴を穿ち、左の主錨を脱落させる。

カタパルトがひしゃげ、炎が航空燃料に引火して甲板を黒く焼いた。

当たり所の良かった一発が、三連装砲塔の天蓋を破って炸裂し、砲塔を真っ二つに引き裂く。

マストが折れて、後部艦橋を押しつぶすように押し掛かった。

機銃は爆風でほとんどが跡形もなくなり、更地となった甲板に炎がのたうつさまは、まさに地獄絵図さながらとなった。

敵戦艦もやられっぱなしではない。一発の一六インチ砲弾が航空作業甲板に命中し、カタパルトをもぎ取った。しかし、対四一センチを想定した「雲仙」の装甲は、それ以上の被害を許さなかった。

第九射を放つと同時に、「鞍馬」から通信が入る。

『姉さん、こちらは終わったわ』

「ん、りよーかい。こっちもすぐ終わらせる」

『よろしく。龍風たちと待つてるから』

「はいはい」

通信がそこで切れる。しばらくして、第十射が砲口から火を噴いた。

「あつちは終わったって」

「そっかそっか。こっちもパツと終わらせちゃって」

「りよーかい」

舞の意図を汲み取ったのか、雲仙が次の砲撃を放つまでに、先ほどよりも時間があつた。何かしらの準備の後、「雲仙」が第十一斉射の砲炎を噴き上げた。艦橋から見える前甲板で迸った光の中に、火焰を吐き出す四門の長砲身三六センチ砲が見える。その仰角は、心持ち低く調整されている。

それまでよりもいくらか低い弾道を描いた八発の三六センチ砲弾は、「雲仙」が第十三斉射を放つ頃に弾着し、七つの水飛沫と一つの火柱を噴き上げる。狙いが低いために、手前に弾着した六発の砲弾のうち、雲仙の意図した効果を発揮したのは四発だった。

水中弾効果。一式徹甲弾が、ある条件下で発現させる特殊な仕様によって水中を直進した砲弾は、あらゆる艦船共通の弱点である喫水線下の下腹に突き刺さり、あつさりと大穴を開けた。威力こそ魚雷に劣るものの、バルジの妨害を受けない水中弾は、いかに実力を発揮

し、すでに沈黙している敵戦艦に、トドメとなるには十分過ぎるほどの浸水を引き起こす。

「撃ち方待て」

第十一射の効果を見た舞は、雲仙に命令する。『雲仙』は、第十四射の準備をしたまま、加熱した砲身を上向けて砲撃を中止した。第十二、十三射が連続して落下すると、敵戦艦は右舷への傾斜を急速に高め、ついに横倒しとなった。威容を誇った丈高い艦橋が衝撃で叩き折れ、黒光りする船腹が天を仰いだ。最早二度と、その脅威を洋上に曝すことはない。

舞は筋肉を弛緩させ、一息を吐く。

「作戦完了・・・かな？」

双眼鏡を燃え盛る敵艦へ向け、舞は確認を取るように呟く。

「捕捉した敵艦は全部沈めたみたいだよ？」

「うーん、ならいつか。そろそろ陽も昇るし、早く帰っちゃお。『逐次集マレ』を掛けといて」

「はい」

すぐに、『雲仙』から五隻の僚艦へ通信が飛ぶ。これにより、彼女たちの一連の戦闘は終わりを迎えた。

「お疲れ様です。提督、雲仙さん」

開いていたドックへと艦体を押し込めた『雲仙』から降り立った舞と雲仙を、ドック脇で迎える声があった。戦闘中に結んでいた髪を下ろした舞は、声の主に手を振る。

肩から先のないセーラー服に、黒のニーハイソックス。青の一本線が入ったチョーカー。二頭の龍が描かれたリストバンドを左手に嵌めている。軽巡洋艦娘の奥入瀬は、朝早くの帰還にもかかわらず、柔らかな笑みを浮かべていた。快活なポニーテールが揺れる。

「ただいまー」

奥入瀬へ駆け寄ってそう言った雲仙は、彼女とは対照的だ。肩口の大きく開いた巫女服に、袴をアレンジした濃い赤のチエック柄スカートを着ている。舞は会ったことがないが、金剛型四姉妹の服装によ

く似ているらしい。同型の鞍馬は、スカートが濃緑のチエツク柄だ。髪型は、緩いカールのかかったロング。それがあたかも、軽い鳥の羽のように風に漂う。

雲仙の後に続いた舞は、笑顔のまま軽く手を上げ、砕けた敬礼をする。奥入瀬も同じようにして答礼した。

「泊地の警備お疲れ様。特に何も？」

「はい。あ、綾風ちゃんは栗駒先輩が宥めてくれます」

「ほんとう？助かったー」

心配事の種が事前に摘み取られていたことに、安堵のため息を漏らす。件の駆逐艦娘には、所謂「ヤンデレ」の気があるようで、戦闘に出してあげないと、半日ほど詰め寄られることになるからだ。

もつとも、頻度の差はあるとはいえ、同じような症状を発症する艦娘はもう一人いるのだが。

——さすが栗駒先輩、よくわかってらっしゃる。

よく気が付く重巡洋艦娘を拝みたい気分で、舞は手を合わせた。が、そう思ったのも束の間。

「後で、九頭龍ちゃんと演習させてあげてくださいね」

「結局それかああああああっー」

——さすが栗駒先輩、よくわかってらっしゃる。

さつきと全く違う意味合いで、舞は同じ感想を抱くのだった。栗駒先輩、今日のおやつ抜き。

今夜は、騒がしい夜になりそうだった。

こほん。舞は咳払いを一つ。

「ま、まあそれは置いといて」

可及的速やかに、解いておかなければならない疑問がある。

「奥入瀬、一つ訊いていい？」

「はい？」

奥入瀬は可愛らしく首を傾げる。

「……紀伊は？」

舞は、この泊地の秘書艦の居所を尋ねた。

「……」

沈黙。

「紀伊は？」

再度尋ねる。

「・・・あ、あははは」

奥入瀬の乾いた苦笑に、舞はうなだれる。

タウイタウイの秘書艦を務める戦艦娘は、真面目で仕事のできる大和撫子だが、長らく出番がないと、こうして時々拗ねてしまうのだ。

「・・・後で声掛けとくか。自室でしょ？」

「はい。お願いしますね」

若干困り顔で笑う奥入瀬に頷く。一方、雲仙はどこか楽しげな様子だ。

「いつそ一日ほつといてみなよ。面白い反応が見られるかもよ？」

そんなことをのん気に言った次の瞬間、奥入瀬の表情が引き攣ったのに気づいたのは、舞だけだった。

「へー、それは楽しみですね」

ギクリ。

肩を大きく震わせた雲仙は、冷や汗をダラダラと流して、ゆっくりと後ろを振り返る。

雲仙とよく似た服装。ただし、こちらは完全な巫女服で、スカートではなく深紅の袴を穿いている。両袖の端には桜の花びらが散りばめられており、戦国時代の姫君を思わせる長く幅の広い黒髪に、水平線から昇る太陽をイメージしたティアラが輝いていた。

件の艦娘——タウイタウイ泊地の秘書艦である超弩級戦艦娘、紀伊は、その端正な顔に柔らかな笑みを浮かべている。

「お帰りなさい、提督、雲仙」

「う、うん。ただいま」

突然の登場に驚きつつも、舞は紀伊に答えた。一方、

「お、おとおお、お帰りなさい紀伊姉さん！」

雲仙、動揺しまくりである。

「もー、雲仙たら何言ってるのー。帰ってきたのは雲仙の方でしょ？」
「そ、そうっすね」

口調までおかしくなっていた。ニコニコと擬音が聞こえてきそうな紀伊に対して、明らかにたじろいである雲仙は、体を仰け反らせて頬をひくつかせている。その額には、うっすらと汗が流れていた。

「ところで、雲仙？」

「お、押忍」

「朝帰りなのに元気そうね」

「い、いやー、どうかなー」

明らかに目の据わっている笑顔の紀伊から後ずさる。が、紀伊がその右手首をがっしりと掴んだことで、ついに動けなくなった。紀伊はこれ以上ないほどの満面の笑みを浮かべると、ことさら落ち着いて口を開いた。

「丁度よかった。これから栗駒と朝の稽古なの。一緒に行きましょう？」

丁寧に尋ねる口調だが、そこには明らかに、有無を言わせない迫力が込められていた。「ひっ」という雲仙の悲鳴など意に介することなく、器用に彼女の襟を掴んで稽古場まで引っ張って行ってしまう。おそらく、先に稽古場で待っている栗駒と共に羽交い絞めにされ、強制的に道着に着替えさせられたうえで、みっちりその剣術をしごかれることだろう。

もがく雲仙の叫び声が、ドック脇に響いていた。

「ちよっ、提督笑ってないで助けてよー!」

「朝御飯までには戻ってねー」

「この裏切り者ーっ!!」

「「いただきまーす!」」

食堂に集まった泊地所属の全艦娘が、一時に手を合わせ、朝食に感謝の意を示す。艦娘の食事を担当する食堂部の貴澄貴子が、その挨拶に微笑んでいた。

「あー、死ぬかと思ったー」

あれから約一時間。げっそりと痩せているように錯覚する雲仙が、一番お腹を空かせているようだった。箸を取るや否や、あらゆるお

ずをすつ飛ばしてご飯に手を付けた。

「うつつ、美味しい・・・」

涙を浮かべながら、あつという間に一杯を平らげ、貴子におかわりを受け取りに行く。その様子に嘆息したのは、優美にバランスよく箸を動かす栗駒だった。

「あの程度でへこたれるな。清風を見習ったらどうだ」

話を振られたのは、同じように朝稽古に参加した駆逐艦娘だ。栗駒の斜め右前に座る彼女は、機械的と思えるほど、淡々とおかずを口に運んでいた。

いや、ちよつと待て。

「おーい。清風ー?」

普段なら、栗駒に褒められると飛び上がって喜ぶ彼女が、まったくの無反応だ。訝しんだ霜風が、清風の顔の前で手を振る。

「・・・おい。清風が灰になってんだけど」

「む?」

栗駒の箸がピタリと止まった。

「・・・どういうことですかね、栗駒さん?」

半目の雲仙が尋ねる。箸を置いて思案顔となった栗駒が、淡々と答えた。

「紀伊に頼まれて、普段より少し厳しめにしたのだが・・・」

「いや、何をどうしたらあなるのよ・・・」

白鶴が呆れ気味に呟く。

この後、雲仙、清風両名が朝御飯によって回復したことで、改めて貴子の素晴らしさを思い知ったタウイタウイ泊地であった。ちなみに紀伊は、後追いでやってきた筋肉痛で秘書官机から動けなくなったところを、舞に散々からかわれたのだった。

◇

艦艇データファイル02

〃紀伊〃型戦艦

全長・・・二九三・六メートル

全幅・・・四〇・一メートル

排水量・・・八万一〇〇〇トン

速力・・・二七ノット

四五口径五一センチ三連装砲三基

五〇口径一二・七センチ連装高角砲十六基

二五ミリ機銃多数

俗に『超大和型』と呼ばれる本級は、文字通り大和型を大きさ、搭載火器共に拡大発展させたものである。ただし、構造物の配置にはいくらか変更点が見られ、大和型、信濃型（改大和型）から得た教訓が活かされていた。特に大きいのは、副砲の廃止と高角砲の増設で、新型高射装置の性能も相まって高い対空性能を誇る。また、爆風の影響範囲拡大により、砲塔と構造物群、航空作業甲板の間隔も、大和型より広く取られることとなった。

紀伊

紀伊型一番艦。長い黒髪に巫女服だが、その下には戦闘時の制服（大和型と共通）を着ている。一応泊地の秘書艦であるが、舞が滅多に出撃させてくれないため、たまに拗ねる。実は泊地で最後に着任した艦娘であり、以後、新しい艦娘は着任していない。

来たる朝陽

「タウイタウイ泊地。」

秘書艦の朝は早い。朝食には程遠い午前六時、紀伊はすでに布団から出て、支度を終えていた。自らの服装を、姿見に向かって確かめて、納得するように頷く。それから姿見にはカバーを掛け、部屋を後にした。

紀伊の向かう先は、鎮守府内の道場だ。毎朝、栗駒と共に稽古をしている。

寮の入った庁舎から道場まで、廊下と外通路を走って五分くらいだ。紀伊の履いた下駄が、カランコロンと高い音を出していた。

ふと外を見れば、庁舎の周りを走っていく影が見えた。元気なポニーテールを揺らしているところから、奥入瀬だとわかった。稽古には参加していないが、彼女も朝早くから自主訓練に余念がない。

「やだ、遅れてしまいますわ」

と、ゆつくり歩いていく紀伊の後ろから聞こえてきたのは、先日朝稽古で灰と化した駆逐艦娘の声だった。サラサラのロングヘアを揺する清風を振り返り、紀伊は声を掛ける。

「おはよう、清風。まだ時間は大丈夫よ」

「あら、おはようございます紀伊さん。違うの、早くしないと、栗駒様の着付けているところが見れないでしょう?」

「そういうこと・・・」

そのまま走り抜けていく彼女を、紀伊は苦笑して見送る。栗駒を理想の“男性”像として憧れる清風は、こうして件の重巡洋艦娘を追いかけているのだ。栗駒の方も特に迷惑がる様子もなく、朝稽古への参加を申し込んできたときは、それは嬉しそうにしていたものだ。

——少しゆつくり行きましようか。

そんなことを思いながら、外通路への扉を開く。

朝早くても、泊地は温かい。そっと吹き付ける風に深呼吸をして、新鮮な空気を胸一杯に吸い込んだ。美味しい、という表現は、少しずれているだろうか。ただ感覚としてはそれに近い。無駄な混じり気

のない、泊地の朝だ。

——鶏舎の様子でも見ていきましよう。

興味が高じて島風型姉妹が始めた養鶏のことを思い出した紀伊は、元気なニワトリたちの姿を見に行こうと、寄り道をすることにした。

「ふう・・・」

朝稽古を終えた紀伊は、道場内に設置されたシャワー室でさっぱりとして、稽古中は結んでいた長い髪をタオルで丁寧に拭きながら更衣室へ戻った。甘酸っぱい汗の匂いがする部屋の中には、すでに着替えを終えようとする栗駒と清風がいた。

「先に失礼するぞ、紀伊」

「お疲れ様ですわ、紀伊さん」

栗駒が黒の詰襟を上から三番目のところまで留めて、先に更衣室を出る。続くようにして、島風型共通の制服の上からカーディガンや羽織った清風が、栗駒の横に並んだ。

——あの二人、付き合ってるのかしら。

まさかね、と考えて、紀伊も元の巫女服へ着替え始める。体を巻いていたバスタオルを取り払い、棚から丁寧に畳んだ服を取り出す。露わになった超弩級のそれが、たわわに揺れた。

テキパキと着付けていくのは、朝と変わらない。数分のうちに全てを整え、大鏡で確認する。納得の仕上がりに。使った道着は、後で洗濯するために籠にまとめておく。

更衣室を後にし、道場の窓の戸締りを確認、電灯もすべて消す。それらを指差し確認して、扉を閉め、鍵をかける。これで完了だ。

「よし」

やりきったように鼻から息を吐いた紀伊は、くるりと踵を返し、道場を後にする。見上げれば、先よりも高い位置に太陽があつた。そろそろ朝食時だろうか。そんなことを思いながら、履いた下駄をカラコロンと鳴らして、舗装された通路を歩いていく。

ただ、紀伊の選んだ道は、行きの時とは違っていた。食堂のある庁舎の方ではなく、各艦が停泊する港湾施設の方へ足を向けたのだ。

埠頭が近づくにつれて、風も感じやすくなる。その中には、確かに潮の香りが含まれていた。これが、朝だとまた違うものなのだ。その匂いが、紀伊は特に好きだった。

六つある埠頭に、紀伊の艦は係留されていない。大きすぎて近づけないのだ。代わりに、島風型や栗駒たち巡洋艦が埋めていた。その内、第一埠頭に係留されている巡洋艦を見止めて、紀伊はその舷側に歩み寄った。

艦首には、帝国海軍の象徴たる菊の御紋が輝く。艦体は、巡洋艦としては大きい部類に入るだろうか。『奥入瀬』をさらに引き延ばしたような細身の艦体は、見るからに素早そうだ。搭載されている三連装砲塔が、さらにながしりとした印象を与えている。

艦全体を眺め見て、おそらくこの艦の主は起きているだろうと確信した。息を吸い込み、『彼女』にはつきりと聞こえるよう、声を張り上げる。

「千尋さんーおはようございまーすー」

艦橋の窓の向こうに、きらめく人影が見えた。

「紀伊さんー」

艦橋の横、見張り所から顔を覗かせたのは、紀伊と同じように巫女服をまとった少女だった。長い髪は透き通るように白く、神話に登場する神聖な白蛇を思わせる。風にはためくそれを押さえ、彼女は見張り所のへりから飛び降りた。

巡洋艦の艦橋とはいえ、トップの見張り所ともなればそれなりの高さがある。普通ならただでは済まない。

が、不思議な現象が起きた。重力に引かれて落下していた彼女が、甲板が近づくにつれて次第に減速しだしたのだ。袴から伸びた足が甲板と触れるころには、その速度はゼロに近くなり、ふわりと軽い羽のように着地した。それから、特に何かを気にするわけでもなく、紀伊の方へとやってくる。

「おはようございます」

明るい笑みを浮かべて、紀伊に挨拶した。大きな笑顔に、紀伊も自然と顔がほころぶ。

彼女は、名を村雨千尋といった。軽巡洋艦「三瀬」の主であるが、紀伊たち艦娘とは違う。「船魂計画」と呼ばれる人工BOBの建造を目的とした計画の一号艦として、人間の手によって作られた「三瀬」は、艦娘の代わりとして人間の少女を選んだ。

しかし、計画の失敗によって、千尋は「三瀬」の魂に取り込まれ、以後は艦娘と同じ存在としてこのタウイタウイで戦っている。

「これから御飯ですか？」

紀伊の問いに、千尋は曖昧に頷いた。

「はい。皆さんに朝食を作らないと」

「賑やかそうですね」

紀伊は、千尋をタウイタウイの食堂へ誘うことはしなかった。以前はやっていたが、断り続ける千尋に無理強いはできない。

「あ、そうだ。お漬け物がいい感じになったので、今夜あたりに届けますね」

誤魔化すように柏手を打った千尋の言葉に紀伊は目を輝かせた。

「ほんとですか？楽しみです」

「気に入っていただけで良かったです」

千尋が艦内で作っている漬け物は格別だった。ごはんのお供としてこれ以上のものは存在しない。対抗可能なのは、取れたての鶏卵を使った卵かけご飯くらいのものだ。

「それじゃあ、こちらも何か、おかずを用意しておきますね」

「ありがとうございます」

「和食でいいですか？」

「もちろんです」

千尋も微笑むと、ちらっと艦の入り口の方を見遣って、切り出した。

「それじゃあ、そろそろ。皆待ってますから」

「すみません、朝食時に」

お互いに手を振って分かれる。千尋は「三瀬」の艦内へ、そして紀伊は、元のように庁舎へ。目的は同じでも、帰る場所は違うのだ。

それを寂しいと、今はもう感じない。思う必要はないことに気づいた。

朝食の話題が出たことで、不覚にも紀伊の腹の虫が鳴り出した。それにほんのりと頬を染めて、歩調をわずかに早める。目の前に迫りつつある泊地の庁舎は、朝陽に照らし出されてどこか神々しささえ感じられる光景だった。その一角にある食堂から、朝の賑わいが漂っていた。「あ、紀伊さん！」

そんな紀伊の後ろから、声がかかった。元気ハツラツとして明るさに満ちた声だ。タツタツと駆けよってくる足音からも、声の主が誰であるかは言うまでもなくわかった。

振り向けば、紙袋を抱えた奥入瀬が走ってきていた。

「稽古、終わったんですね」

「ええ、いい運動だったわ。奥入瀬も、随分走っていたじゃない」

「えへへ、走るのだけは得意ですから」

照れたように顔を掻く仕種が愛らしい。変人揃いのタウイタウイ泊地で、唯一と言っていい真面目な彼女は、こうして時折見せる可愛らしさが、特に際立って見えた。

「艦娘なのに、走るのが得意っておかしいですよ」

「そうかしら？ 島風型の皆は、いつも元気にはしゃぎまわっているわよ？」

「あの娘たちは別ですよ」

そう言って苦笑いした。軽巡である彼女にとって、元気が服を着てするような島風型の皆は、頭を抱えたい原因かもしれない。

「ていうか、あの娘たちがはしゃぎ回るの、大体九頭龍が焚き付けるからですよ」

奥入瀬は、タウイタウイ所属のもう一人の軽巡洋艦娘の名前を出した。防空巡洋艦であり、本来水雷戦隊を率いる立場ではない彼女は、何をどう間違ったのか、夜戦が大好きであった。自由奔放な性格で、奥入瀬の頭痛の種を増やして回っている。

「まあ、ほんとは私が、水雷戦隊のボスとしてビシツと言うべきなんですよ」

「……無理でしょうね」

「無理ですね」

二人して、諦めに似た苦笑を漏らす。島風型の四〇ノットに追いつける艦は、残念ながらタウイタウイには存在しなかった。三六ノットと、速い部類に入る奥入瀬を以ってしても、島風型の暴走を止めることはできない。

「そうは言っても、元気なのはいいことですから」

そう言いながら、奥入瀬が庁舎の入り口を開く。次の瞬間、一陣の風が廊下を走り抜けていった。

「ごらっ！霜風！廊下は走らない！」

奥入瀬の注意に、呼ばれた駆逐艦娘は「やべっ」と呟いて急制動を掛けた。

「まったく、もう」

奥入瀬が紙袋越しに溜息を吐く。その横顔を窺って、紀伊は可笑しさが込み上げてきた。

「なんだか、お母さんみたいね、奥入瀬？」

「せ、せめてお姉さんって言ってくださいよ」

わずかに顔を赤くしながら、奥入瀬がプクーツとほつぺを膨らます。容姿相応の可愛らしさに、紀伊はまたクスリと笑いを漏らした。

紀伊と奥入瀬が入った扉から、食堂はすぐだ。掛けられた暖簾をくぐると、すでに大半の艦娘が集まって、食事の準備か、おしゃべりをしていた。準備は二人を当番制で回しているから、この中のほとんどは、おしゃべりをしに集まっているだけだ。

ちなみに、その場にいなかったのは、超巡洋艦の一番艦と、夜戦好きの防空巡洋艦、そして――

「・・・また、提督は寝坊ですか」

食堂を見回した紀伊は、盛大な溜息を吐いた。これで皺が増えたら舞のせいだ。

「まだ、起きてきませんね」

食堂部の貴子が、奥入瀬から紙袋を受け取って答えた。奥入瀬の持っていた袋の中身は、どうやらパンだったらしい。庁舎からそう離れていないところに造られたパン焼き釜は、舞たつての要望で食堂部が製作したもので、毎朝焼き立てのパンを提供してくれていた。

紀伊はちらりと時計を確認し、もう一度溜息を吐く。

「・・・いい加減起こしてきますね。そろそろ朝御飯ですし」

「お願いします」

細い眉を八の字に下げ、貴子に見送られて、紀伊は食堂を後にする。執務室の横にある提督私室は、庁舎の中でも寮に近いところにある。食堂とはほぼ反対側だ。

廊下に流れ込む朝陽の中、ゆったりとした紀伊の足取りに合わせて、下駄が鳴る。考えるのは、もちろん舞のことだった。

致し方なかったこととはいえ、舞は十六歳の若さで提督となった。以来、慣れぬことのはずなのに、懸命にその職務を果たしてくれている。紀伊としても、頭の下がる思いであった。

とはいえ、最低限の生活リズムは守って欲しいものだ。

舞の着任以来、秘書艦兼お守り役として戦ってきた紀伊は、内心で溜息を吐きながら、辿り着いた舞の部屋の扉をノックするのだった。

◇

艦艇データファイル03

〃三瀬〃型軽巡洋艦

全長・・・一九一・〇メートル

全幅・・・一八・八メートル

排水量・・・一万一〇〇トン

速力・・・三六ノット

六〇口径一五・五センチ三連装砲五基

六五口径一〇センチ連装高角砲二基

五〇口径一二・七センチ連装高角砲二基

六一センチ四連装魚雷発射管二基

二五ミリ三連装機銃六基

「船魂計画」——人類の手でBOBを建造する計画の、一号艦である本艦は、結果的に本計画最後の完成艦となった。実験の過程で、浅羽少佐以下参加した乗組員全員が妖精となり、コア・ガールの村雨千尋も艦娘となってしまっている。Z海域調査の目的でタウイタウイ泊地に派遣された本艦は、同地で唯一建造を行えるBOBであったが、

千尋の消耗が激しく、紀伊を最後に建造を行うことができなくなっている。

村雨千尋

「三瀬」のコア・ガール。長い白髪に、巫女服をまとった少女。元は人間であったが、「船魂計画」の失敗により、崩壊した「三瀬」の魂に取り込まれ、以後は艦娘となっている。『靈感』と呼ばれる不思議な感覚を持ち、深海棲艦を含めたあらゆる艦船の魂を感じ取ることができる。

鉄鯨の飛沫

『靈感』を研ぎ澄まして、村雨千尋はその艦を探していた。彼女だけが持つ不思議な力は、魂の発する波動を敏感に感じ取り、その居場所を突き止めようとする。例えばどんなステルス機であろうと、潜水艦であろうと、彼女の『靈感』から逃れることはできなかつた。

幸いにして、深海棲艦は、ステルス性能を持った機体も艦船も保有していない。潜水艦の騒音レベルも、現代最新鋭潜水艦から比べれば、お粗末なものだ。そういった意味で、所詮は第二次大戦級の兵器であつた。

「・・・見つけた」

『靈感』が、探し物——タウイタウイからほど近い、民間船航路に侵入しようとする敵潜水艦を見つけ出した。

「対潜戦闘ー」

千尋が叫ぶと、にわかに艦後部が慌ただしくなつた。そこにまとめられた対潜戦闘用の爆雷と投射機に妖精たちが取り付き、千尋の指示に合わせて調定深度を設定するのだ。

——まだ、いるかもしれない。

すぐ近くの敵潜水艦を捕捉して離さないようにしながら、千尋は少し、『靈感』の探查範囲を広めてみた。深海棲艦の潜水艦が、単艦で民間船航路に近づくとはい思えない。『ウルフバック』——『群狼戦術』を多用する潜水艦を押さえるには、多数の対潜艦艇を用いた作戦が必要だ。

『千尋、こつちも捉えたよー！』

その声は、探查範囲を広げた瞬間に通信機から聞こえてきた。千尋とは別の対潜部隊を率いる軽巡洋艦——「九頭龍」だ。

「了解です。そちらはお任せしますね」

『はいよっ』

九頭龍が答えた。

「九頭龍」は、「三瀬」や「奥入瀬」とは一線を画する軽巡洋艦だ。対艦戦闘ではなく、艦体防衛に主眼を置いた彼女は、山ほどの対

空砲と、潜水艦に備えた優秀な対潜装備を持つている。単純な対潜能力で言えば、「三瀬」よりも上だ。

タウイタウイの主力駆逐艦である島風型の対潜装備は十分とは言えないが、対潜戦闘に長けた二隻の軽巡洋艦による先導があれば、少ない爆雷を効果的に使用できる。

「清風、綾風、この潜水艦は私が仕留めます。二人は周辺の警戒を」
『承りましたわ』

『了解です』

「三瀬」と組んでいる二隻の駆逐艦の艦娘から返事があつた。それを確認して、千尋は敵潜水艦の直上へと近づいていく。

前方投射兵器——いわゆるヘッジホッグがないことが悔やまれる。「三瀬」が敵潜水艦に効果的な攻撃を加えるには、その頭を押さえるしかない。

ともあれ、あちらの位置はばっちり捉えているのだ。まずは確実に、この潜水艦を屠らなくては。

「爆雷調定深度二〇（二十メートル）」

『霊感』からもたらされた敵潜の深度を読み上げる。艦尾の妖精たちがちよこちよこ動き、爆雷の深度を設定した。

——後、〇二。

敵潜は、海面下で息を潜めている。潜水艦を着け狙う水上艦艇に対して、奴らが唯一取れる回避方法だ。機関出力が低く、水中では一〇ノットも出せない潜水艦は、探信中でも一五ノットを発揮可能な水上艦艇から逃れる術など存在しなかった。

「爆雷投射、及び投下用意」

三式投射機——K砲と呼ばれる爆雷投射機と、ロックの掛けられた爆雷投下軌条では、担当の妖精が固唾を吞んで指示を待っているはずだ。

——〇一。

もう間もなく、敵潜の真上を通過する。千尋はその時を、ゆっくりと待っていた。「投射始め」のタイミングを、呼吸をゆっくりにして計る。

——今！

敵潜の、直上だ。

「投射始め！」

千尋の指示から一拍、艦尾方向からポップコーンが弾けるような音が連続して届き、投射された爆雷が着水の飛沫を上げる。それに続いて、軌条から爆雷が投下された。

後は、爆雷が調定深度に達するのを待つばかりだ。

「取舵」

爆雷を投下した「三瀬」は左に艦首を振り、第二撃に備える。

次の瞬間、真下から突き上げるような衝撃と振動が、「三瀬」の艦橋を震わせた。白濁の水塊が海面から盛り上がり、戦艦の砲撃にも引けを取らない水飛沫を振りまく。それが連続して、海域を白く泡立たせた。

『靈感』から、敵潜の反応が消失した。

撃沈確実だ。

爆雷による轟音と気泡の群れは、使用直後の一定時間、ソナーの効果が無効にする。だから、通常は敵潜の撃沈を、海面の浮遊物や、爆音が収まった後の艦体圧壊音で判断するしかない。その点、どんな状況でも敵潜を捉えられる『靈感』は、非常に有用だった。

「撃沈確実」。九頭龍さん、そちらはどうですか？」

再び、『靈感』で周囲の反応を探りながら、千尋はもう一つのキラークリームに呼びかける。

『ちよつと待って・・・よし、浮遊物確認。撃沈確実！』

——これで、二隻仕留めた。

二隻から放たれる魚雷は、一斉射で十二本。それだけ、輸送船団への脅威が減ったことになる。ただし、どれだけの敵潜が民間船航路への侵入を図ろうとしていたのかは、定かではない。

——こんな時、対潜用の軽空母がいれば・・・！

タウイタウイに存在しない艦種を思い浮かべても、詮無きことだ。こればかりは、私たちが頑張つてカバーするしかない。

乙海域からの潜水艦の侵入は、何としても防がなければ。

『千尋、なんか新しい反応はあった？』

急かすような声が「九頭龍」から聞こえてきた。千尋は苦笑して、さらに『靈感』の探知範囲を広げた。精密測敵はできないが、隠れている敵潜を発見するには十分だ。

反応があった。

「反応、一」

『やっぱりいた』

「私の近くです。こちらで叩きます」

『了解。周辺警戒はこつちで引き受けるよ』

「お願いします」

短いやり取りがあった。

反応は「三瀬」の右舷後方、レイヤーデプスの下で息を潜めている。こちらが敵潜を狩っている様子を観察していたのだろうか。三隻目の敵潜の不運は、観察対象であるキラートームを率いていたのがただの軽巡ではなく、『靈感』による探知が可能な「三瀬」だったことだ。

——あの深度なら、魚雷による反撃はない。

千尋はそう判断していた。

「清風」と「綾風」を従えた「三瀬」は、一〇ノットの速力で、三隻目の目標に近づいていく。反撃の可能性は低いとはいえ、その歩みは非常に慎重だ。それにももしかしたら、『靈感』で捉えることのできない、「ミス・シップ」がいるかもしれない。

——一〇。

距離は後一千。「三瀬」以下三隻のハンターたちは、潜水艦を仕留めるためのビックリ玉を、艦尾で準備している。水中爆発の特性を活かした爆薬入りドラム缶は、その衝撃波で敵潜を包み込み、紙ほどもない隔壁を押し潰すのだ。

ちなみに、この衝撃波を応用して魚を気絶させる漁があるが、環境にあまりよろしくないもので、よい子は真似してはいけない。それは置いておいて。

異変が起きたのは、彼我の距離が九百に縮んだ時だった。

「・・・!?!」

敵潜の動きを監視していた千尋は、突然の出来事に目を見開いた。レイヤーデプスの下にいた敵潜が、にわかには動きだしたのだ。タンクから排水し、ゆつくりと浮上している。

———どうということ・・・?」

千尋からすれば、信じられない思いだ。今しがた沈めようとした敵潜水艦が、ゆつくりと浮上を試みているなど、どこの馬鹿が信じるだろうか。

『千尋さん、どうしますか?』

「三瀬」の左後方に着ける綾風が、確認を求めてきた。千尋はしばし黙考する。その間に、距離は六百まで縮まっていた。

さらなる動きがあった。潜水艦から、音が聞こえてきたのだ。規則的なそれがモールスだと気づくのにそれほど時間はかからず、耳を澄まして短符と長符を聞き取る。文章の内容は、長くなかった。

———・・・ワ・・・レ・・・イ・・・ゴ・・・ウ。

ワレイゴウ。

我、伊号。

伊号潜。潜水艦は、自らを伊号潜水艦———日本海軍の潜水艦と名乗った。

思い当たる節はあった。千尋は瞬間的に考え、聴音手にピンガーでモールスを打つように指示する。内容は、

「我、稲妻アサヒ」

同じように短いものだった。

浮上を続ける伊号潜の、予想浮上位置を中心にして、三隻のBOBが円運動をする。白い航跡が真円を描き、次第に内部の海面が凪いでいく。これは、水上機の回収時にする、海面の波を抑える方法だ。

しばらくすると、海面が大きく盛り上がった。先の爆雷炸裂時とは明らかに異なる。大きな物体がその内にあることがありありとわかる海水の塊がパツクリと割れると、その中から水飛沫を迸らせて、鋭い日本刀のような艦首が現れた。飛び上がるようにして海面から突き出た伊号潜は、やがて重力に引かれて凪いだ海面に着水する。一層

大きな飛沫が上がり、押し退けられた海水が波となって「三瀬」に届いた。

「イムヤちゃん・・・」

浮上した伊号潜——横須賀鎮守府所属の「伊号一六八潜」の艦娘のあだ名を呟き、千尋は苦笑いをする。相変わらず、趣味が悪い。

伊号潜の小さな艦橋に、人の姿が現れた。太陽に輝くような深紅の髪。上半身はオーソドックスなセーラー服だが、その下にはスクール水着を着ている。大きく伸びをした彼女は、「三瀬」を見つけて大きく手を振った。

イムヤは、小さな探照灯に取り付き、発行信号を送ってきた。

『タウイタウイ泊地まで誘導されたし』

——無茶言うなあ。

内心の苦笑をさらに大きくする。が、特に問題はない。周辺の敵潜水艦は、取り敢えず一掃した。

「九頭龍、引き揚げましょうか」

『ん、そーだね』

九頭龍も快諾した。

六隻の対潜部隊が集まる。彼女たちは、突然の来訪者に微妙に戸惑いながらも、巡航潜水艦の周囲を囲んで、その水上速力に合わせながらタウイタウイへの帰途に就いた。

露天艦橋で風に身を任せている潜水艦娘が、一番気楽そうだった。

「いやー、後少しで沈められるかと思ったわ」

埠頭に上がるや否や、こともなげにそう言ったイムヤに、六人のキラハンターは苦笑を浮かべるしかなかった。

実際、結構シャレになっていない。

「もう。黙って観戦なんて、悪趣味ですよ」

千尋の忠告にも、テヘツと舌を出しておどけてみせるだけであった。言うだけ無駄なのは、千尋もよく承知している。大胆且つ慎重に、潜水艦のモットーだ。

まあ、こちらの胃に悪いことは控えてもらいたいものだが。

「あ、そうだイムヤさん。お土産はあるの？」

思い出したように尋ねたのは、龍風だ。こうして、お忍びでタウイタウイを訪れるイムヤは、よく日本からお土産を持ってきた。

「もちろん。後で持つてくるから、楽しみにしててよね」

そう言つてイムヤは、ウインクをきめた。

「それで、イムヤちゃん」

沸き立った駆逐艦娘に変わり、千尋は少し、声の調子をシリアスにする。

「今回はどういった用件で？」

「うん、ちょっと」

そう言つて彼女は、右手に提げていた防水バツクを掲げた。

「命令つて言うか・・・依頼？」

◇

艦艇データファイル04

“九頭龍”型防空巡洋艦

全長・・・一八五・二メートル

全幅・・・一五・八メートル

排水量・・・八六〇〇トン

速度・・・三三・四ノット

六五口径一〇センチ連装高角砲六基

六〇口径七・六センチ連装高角砲二期

二〇ミリ四連装機銃十基

二〇ミリ単装機銃二十基

本級は、増大する航空機の脅威に対して、艦隊防空の要となるべく、秋月型駆逐艦と共に計画された。基本的には、秋月型をそのまま巡洋艦にしたような艦だが、あちらが駆逐艦としては最大なのに対し、こちらは巡洋艦としてさほど大きな艦ではない。これは、工期短縮や整備性を考慮して、艦体を青葉型と共通にしたためである。また、日本の巡洋艦としては珍しく、航空兵装と雷装を全廃しており、正に艦体のありとあらゆるところが、艦隊を守る兵器で埋め尽くされている。

九頭龍

九頭龍型一番艦。深い緑の長髪を二つに結び、青葉型と同じ制服を着た少女。防空巡洋艦であるが、なぜか夜戦が好きという変わり者。面倒見はいいのだが、奥入瀬とは違い、駆逐艦を積極的に焚き付ける。そのため、時に紀伊や栗駒にこっぴどく絞られることも。

極秘の依頼

「いらっしやい、イムヤちゃん！」

横須賀からの突然の使者を、舞は笑顔で迎えた。

「お久しぶり、舞さん」

イムヤも屈託ない笑顔で答える。それからスツと、紙袋を取り出した。デザインを見ると、有名な和菓子店のものだ。舞の好物である。

「これ、お土産です。人数分ありますよ」

「わあー、ありがとう！」

心底嬉しそに受け取った舞は、早速中身を確認した。二種類の菓子折りが入っている。

舞の表情が、ほんの少し寂しげなものに変わった。

「さすがに、餡蜜は無理だよね」

イムヤの方も、申し訳なさそうに手を合わせた。

「すみません、私の設備じゃ日持ちがしなくて・・・」

「ううん、気にしないで」

舞がこの和菓子店を気に入っているのは、昔——まだ日本に住んでいた時だから、十歳にもなっていない頃に、おばあちゃんが買ってきてくれた、カップ入りの餡蜜に感動したからだだった。それから、たまに直営のお茶処に行ったりもした。子どもころから親しんだ味なのだ。

「これは、後でおいしくいただくね」

舞はそう言って紙袋をソファに置き、イムヤに着席を促す。そして自らも、彼女の向かいに腰かけた。

「お茶、入りましたよ」

丁度見計らったように給湯室から出てきたのは、秘書艦である紀伊だ。いつも通りの巫女服を揺らし、お盆に乗せた三人分の湯飲みを、舞とイムヤ、そして自分の前に置いた。取り敢えず、これで話の準備は完了だ。

「それで、イムヤちゃん」

出されたお茶で唇を湿らせ、舞が話を切り出す。その双眸は、すでに艦隊を指揮する提督のそれだった。

「依頼があるらしいけど、何?」

舞としては、これ以上何か新しい作戦は実施できない。現在のタウイタウイは、戦力的にはかなりギリギリなのだ。Z海域の調査で一杯である。それに、こここのところの「ミス・シップ」の存在も気になる。

コクリと頷いたイムヤは、持っていた防水バッグから書類を取り出した。黒い表紙が付けられて綴られた、作戦指令書だ。

「まだ、先の話なんだけど」

イムヤはそう前置いて話を続ける。

「トラック攻略作戦における、側面支援をお願いしたいの」

「側面支援?」

疑問は尽きない。舞が頷くと、紀伊が席を立ち、トラック諸島周辺の大まかな地図を持って戻ってきた。それを机の上にパラツと広げて、さらに続きを促した。

「パラオ泊地の設営は知ってるでしょ?」

「ええ、もちろん」

二ヶ月前の海戦で海軍が獲得した島々は、フィリピンよりもさらに東寄り、つまりトラック諸島の近くに位置する。太平洋戦域における最重要拠点と海軍が位置付けるトラックは、現在ハワイと並んで、太平洋深海棲艦隊の本拠地だ。このトラックに対し、十ヶ月ほど前に奪還したマリアナ諸島と合わせて圧力をかけるべく、そしてトラック攻略戦における出撃拠点とすべく、海軍はパラオ泊地の設営を急いでいた。

「あれ以来、対豪航路における深海棲艦の出現が激減したわ」

「どれくらい?」

「今のところ、水上部隊の襲撃は一度もない。潜水艦にしたって、頻度が激減してる」

つまり海軍の予想以上に、パラオ奪還の効果が上がっているということだろうか。

「それにしたって、トラック攻略は時期尚早なんじゃ・・・」

「ああ、実はね。そもそもトラック攻略は、二段階か三段階に分けて行うつもりだったの。だからそのうちの一段階目の発動を前倒ししただけ」

それは初耳だ。まあ、そもそも舞たちは海軍の作戦に直接関わることが稀だし、というか海軍内でも認知しているのはごくわずかだし、知らなくて当然と言えば当然なのだ。

「二段階目の発動を前倒しにする意味は？」

「うーん、何か確かめたいことがあるとか何とか言ってたけど・・・詳しくはわからないわ」

そこまだ聞いたことで、舞にも大体の事情が呑み込めてきた。つまり、

「私たちには、作戦前倒しによって開いた戦力の穴を、埋めてほしいってことね？」

「〔明察〕」

そういうことらしかった。

「そういうことなら、答えはノーよ」

「・・・まあ、そうよね」

イムヤも、この答えは大方予想していたのだろう。

当然だ。現状、このZ海域を調査しうる戦力はタウイタウイにしかなく、彼女たちが睨みを利かせていなければ、いつZ海域から深海棲艦が出てしまうかわからない。

異形の深海棲艦——『イレギュラー』と呼ばれる艦艇たちをこの海域の外へ出すことは、危険極まりなかった。その最後の門番が、彼女たち『T・T独立艦隊』なのだから。

「第一、私たちが誰かの目に触れることこそ、危険なことで、最も避けるべきことじゃないの？」

タウイタウイに所属するBOBは、その全艦が「本来は存在するはずのない」軍艦なのだ。実際に、この世に生を受けることのなかった艦艇たちの、艦娘。明らかに、彼女たちはBOBのイレギュラーであり、衆人のもとに曝すなどもつてのほかだ。ただでさえ混沌としたこ

の世界が、さらなる混乱の渦に巻き込まれかねない。

それでも、イムヤは退かなかった。

防水バツグの中から、もう一つ、今度は茶封筒を取り出した。こういう時に出てくるのは、大抵が写真だと、舞は心得ている。目で中を見るように促すイムヤに従って、茶封筒の中身を取り出して、広げた地図の上に置く。横から、紀伊も覗き見していた。

「これは・・・」

写真に写っていたものは、舞を驚愕させるに十分過ぎる破壊力を持つていた。

「トラツク諸島沖で撮られたものよ。確か、一月前」

撮影したのは、フィリピン・ルソン島に展開する警備偵察艦隊所属の二式大艇だそう。同島に展開する警備艦隊は、飛行艇母艦“秋津洲”を擁しており、彼女の隊所属機が、定期的にトラツク諸島への接敵を試みているのだという。

写真は、航行する艦隊のうち戦艦をズームしたものだ。いくらか処理はしているのだろうが、非常に映りのいい、きれいな写真だ。飛行艇の練度の高さが窺える。ご丁寧にも、写真の右下には撮られた海域の緯経度が記されていた。

「これって・・・」

紀伊も声を潜める。それを見ているだけのイムヤもまた、険しい表情だ。

見覚えのある艦形だ。ただし、海軍が提督全員に配布している艦型識別表には載っていない。舞がその存在を知っているのは、タウイタウイ泊地にのみ存在する、『特殊深海棲艦識別表』に同型の深海棲艦が掲載されているからだ。

まず目を引くのは、特徴的な四連装砲塔だ。しかもそれを、”リシユリユー”級よろしく艦前部に集中配置していた。ただし、”リシユリユー”級が背負い式に二基八門なのに対し、写真の戦艦は背負い式の二基のさらに前部に一基を配置しており、まるで”最上”型の前部甲板のようだ。つまり、四連装砲塔が三基、十二門。艦後部は主砲塔よりもはるかに小さい両用砲群で埋め尽くされており、さながら

ヤマアラシだ。

そして何より、その戦艦が他の深海棲艦とは一線を画する存在であることを示す、軍艦色と白銀の迷彩。艦首甲板の黄色い紋章。

特異点——「イレギュラー」と呼ばれる、舞たちが追い求める深海棲艦の一隻だった。コードネームは「コマツグミ」。推定口径一六インチの長砲身砲を四連装三基搭載した、異形の戦艦だ。

「どうしてトラック沖にイレギュラーが？」

イレギュラーが確認されたのは、BOBと艦娘が出現してから一年後のことだ。当時から危険海域として侵入が禁止されていたZ海域において、奴らは確認されていた。T・T独立艦隊の創設はその頃とほぼ同時であり、Z海域とイレギュラーの調査と共に、同海域でのみ確認される奴らを監視し、封じ込める任を負っていた。

創設以来、少なくとも太平洋方面へのイレギュラー侵入は防いではたはずだ。それとも「コマツグミ」は、ティモール海からオーストラリア大陸を大回りして、トラック艦隊に合流したということだろうか。

——いや、待つて。一度、T・T独立艦隊の活動が鈍った時があったわ。

それは、今から半年ほど前のことだ。

隣の紀伊も、同じことに思い至つたらしい。ばつの悪い顔をしていた。

「……提督不在の時に、見逃したのね。きつと」

半年前、タウイタウイには提督がいなかった。紀伊によれば前任の提督がいたのは間違いない。ただ、舞が半年前に提督として着任するまでの一ヶ月間、タウイタウイには提督が不在だったのだ。その間の指揮は暫定的に紀伊が執っていたが、提督不在の艦娘の活動が衰えるのは仕方のないことであった。

その間に、薄くなった警戒線を突破するイレギュラーがいてもおかしくなかった。

これまでのイレギュラーとの遭遇率や、紅鶴と白鶴による偵察を元に、舞はZ海域におけるイレギュラーの割合を五パーセントと見積

もっている。一月の間にどれだけの深海棲艦が通過したかはわからないが、「コマツグミ」だけとは思えない。

「イレギュラーを叩くには、T・T独立艦隊が必要なのよ」
イムヤは言った。

確かにその通りだ。イレギュラーは、性能が高いのもさることながら、その機動や戦術も普通の深海棲艦とは一線を画する。練度も高い。

奴らとの戦闘に慣れた、T・T独立艦隊が有用だ。

舞は腕を組み唸った。

判断材料が、まだまだ足りない気がした。

「・・・作戦発動時期は？」

「二ヶ月後——六月辺りと見積もってるわ」

「・・・回答を、もう少し待ってもらえないかな？今は、何とも言えない」

「もちろん。秋山中将もそのつもりで、東郷長官には許可をもらったそうよ」

「ありがとう」

これで少し、時間はできた。

「私たちが参加しない場合、どうするつもりなの？」

「第一段階で進める作戦を縮小するだけ。艦隊の撃破に全力を挙げるわ」

トラックには、強力な機動部隊と戦艦部隊が各一個ずつ展開している。第一段階では、この艦隊を撃破したのち、基地港湾施設への攻撃も試みる。これら施設を破壊することで、トラックにおける深海棲艦の展開能力を大幅に削るのだ。

が、T・T独立艦隊が参加しないとすれば、作戦に参加できるのは一個機動部隊が限度らしい。これでは港湾施設を叩くことは難しいので、艦隊撃破に全力を注ぐという。

その分、第二段階の投入兵力は大きくする必要がある。また、深海棲艦もさらなる増援をハワイから送るであろう。

「どっちにしても、T・T独立艦隊に参加してもらおう意義は大きいわ」

イムヤはそう言つて、話を締めくくつた。

温くなつた湯呑みのお茶を啜る音が、三人分響いた。

◇

艦艇データファイル05

“紅鶴”型航空母艦（改翔鶴型）

全長・・・二五七・五メートル

全幅・・・二六・〇メートル

排水量・・・二万五六七五トン

速度・・・三四・二ノット

六五口径一〇センチ連装高角砲八基

二〇ミリ四連装機銃十二基

常用七十二機、補用十二機

日本空母の完成形とも言える翔鶴型の三、四番艦は、艤装等の差異から俗に紅鶴型、あるいは改翔鶴型と呼ばれる。より対空能力の高い長砲身十センチ高角砲に換装したことにより、総合的な対空能力は前期二隻よりも向上している。この他、竣工時から後の大型艦載機に備えた装備類（カタパルトや着艦制動索）を持つており、特に改装を必要とせず、それらの機体を運用することが可能だ。

紅鶴

翔鶴型三番艦（紅鶴型一番艦）。容姿は翔鶴によく似ているが、毛先に赤のグラデーションが入っている。姉二人に対する強い憧れがある一方、白鶴の姉として気丈に振る舞う。そのためか、性格も非常に落ち着いて、物静かである。

白鶴

翔鶴型四番艦（紅鶴型二番艦）。容姿は瑞鶴によく似ているが、毛先に銀のグラデーションが入っている。二人の姉に会いたいと思うものの、今は紅鶴を大切にしたいと考えている。紫電改よりも零戦が好きで、こっそり積んでいる。

双鶴の饗宴

甲板に並べられた艦載機は、野太い発動機の音を響かせている。風上へと驀進する空母の甲板には、前縁から流れてくる白い水蒸気が一本たなびいており、正しく風に艦首を向けていることを示していた。

暖機を終えた自らの艦載機隊をチラリと横目で見遣って、白鶴は自信ありげに頷いた。すでに攻撃隊の準備は整っており、遮風柵を下げてチヨークを外せば、艦載機は本領とする大空へと駆けていくだろう。その指示となる弓を放つタイミングを、白鶴は自らの右舷を進む姉から図るべく、じつとその艦橋を見つめていた。

「白鶴」含めた機動部隊は、現在セレベス海を南東に進んでいる。第七次深海棲艦調査の準備が整ったことによる出撃だった。

編成は、旗艦「紅鶴」、白鶴、鞍馬、九頭龍、早風、綾風。そしてその前衛として、火力部隊の「紀伊」、奥入瀬、龍風、霜風が配置されている。舞はそのうちの「紀伊」に乗り込んでいた。

「紅鶴」と「白鶴」から放った「瑞山」が敵艦隊を捉えたのは三十分前。戦艦二、空母一を含む艦隊だ。これに向かわせる攻撃隊の準備を、二人は急いでいた。こちらの艦隊は、まだ敵の触接を受けていない。先手を撃つ絶好の機会だ。

その時を今か今かと待ちわびていた白鶴は、「紅鶴」のマストにはためくものを見て、弓を持つ手に力を込めた。

「よー」

マストに掲げられたのは、「攻撃隊発艦始め」を示す旗だ。

艦橋を振り向き、こちらを窺っている妖精に、手振りで「遮風柵下ろせ」を指示する。艦橋にいない今は精神同調ができないため、艦の運行に関わることは全て妖精に頼まなければならない。BOBにとっても、攻撃隊の発艦作業はもつとも危険を伴う作業なのだ。

攻撃隊の前面で風を遮っていた柵が下ろされ、妖精がチヨークに取り付く。いつ見ても、どうして飛ばされないのか、不思議な光景だった。

発艦指揮所に立つ白鶴は、風上に向けて矢を番えた。きりきりと引き絞られる弦。その先を見ながら、横目で姉の様子を窺った。

「紅鶴」に動きがあった。遮風柵のすぐ後ろに位置取っていた一番機の「紫電」改が、スルスルと前に進みだし、やがて大きな力に引つ張られるようにして甲板の前縁を蹴った。重量の大きな機体は重力に引かれて降下し、あわや海面にぶつかると錯覚するが、強力な発動機がペラを回すことで翼に生まれた揚力が、しっかりとその機体を持ち上げた。

「紅鶴」の攻撃隊が発艦を始めた。

「第一次攻撃隊、発艦始め！」

それに倣うようにして、白鶴も自らの艦載機に発艦を命じる。その声が終わらないうちに弦を開放し、張力が伝わって細い矢を艦の前方へと放った。それを合図に、カタパルトに設置された先頭の「紫電」改が加速を始め、「紅鶴」機と同じように大空へと翔け出していた。

発艦作業は続く。一番機に続いて、二番機、三番機。それが終われば、今度は「瑞山」、そして「天山」。

カタパルトのおかげで、その作業は早い。ものの十分で終わる発艦作業を見送って、白鶴は艦橋へと戻った。

すぐに所定の位置に着き、精神同調。舵を預かってもらっていた妖精が、すぐに返してくれた。

『各艦、対空警戒を厳となせ』

すぐに、紅鶴の声が通信機より聞こえた。この艦隊を率いるのは彼女だ。

「紅鶴姉、第二次攻撃隊は？」

無線風刺が解かれているのをいいことに、白鶴は紅鶴に尋ねる。もし第二次攻撃隊を出すなら、早めに準備しなければならぬ。

『もう、白鶴。忘れたの？今回は戦闘機を多めに積んでるから、攻撃機は第一次で全部よ』

「・・・そうでした」

我ながら間抜けだ。自分の搭載機のことを忘れる艦娘って、果たし

てどうなんだそれ。

『第二次は出さず、火力部隊で“イレギュラー”の鹵獲を試みる。それを援護するのが、私たちの役割よ』

「はい」

何かつままないな、と思ったことは、黙っておこう。

攻撃隊は編隊を作り、間もなく進撃を開始しようとしている。全部で七十八機。内訳は、“紫電”改二十四機、“瑞山”二十四機、“天山”三十機。

攻撃隊を出してしまうと、もうやることはなくなってしまう。機体の操作は搭乗員妖精がやっているから、白鶴は母艦の操作に集中するだけだ。空母艦娘ゆえ仕方ないこととはいえ、暇を持て余すのが好きでない白鶴にとっては、これが本当に退屈だった。

とりあえず、左右両舷の対空砲座の動きを確認する。操作自体は白鶴ができるが、手動装填の部分は妖精にやってもらうしかない。滑らかな動きを確認し終わると、後は本当にやるのがなくなってしまうた。

「あーもう！暇あーっ！」

攻撃隊が進発を始めるころ、通信機を完全に切って艦橋で叫ぶ白鶴に、妖精たちは苦笑を浮かべるのだった。

◇

「第一次攻撃隊、進発したそうです」

戦闘時の服装にキャストオフしている紀伊が、隣に立つ舞に報告する。今日も今日とて、舞は第一種軍装に、不釣り合いなキャップ帽を被っている。キャップ帽は旧自衛隊のもので、前面に大きく『184』と『かが』と書かれている。お土産物だろうか。

「了解。こっちはどう？」

「敵艦隊との距離は五十海里。接敵まで一時間です」
「結構近かったね」

「元々、それを狙っていますから」

火力部隊の役割は、非常に難しいものとなっている。なぜなら、機動部隊の攻撃の後、目視で敵艦隊を確認し、“イレギュラー”が存在

すれば、その鹵獲を目指すのだから。

そんなもの、できるはずがないのである。元々鹵獲という方法自体が、ありとあらゆる好条件が重ならなければ取りえないものなのだ。一撃で仕留めるのは簡単だ。だが、寸止めというのは、よほど腕がよくなければ不可能である。その辺りは、生身の人間も兵器も変わらないうい。いやむしろ、兵器は敵を葬ることを前提としているため、さらに難易度は上と言えた。

奇跡を人為的に起こせというようなものである。それでも、過去七回の調査で、五回「イレギュラー」と接敵し、二回鹵獲と調査に成功しているのだから、褒めてもらうには十分すぎる成果と言えた。

「まあ、奇跡は起こすもの、なんて言葉もあるしね」

「?何の話ですか?」

「ううん、こっちの話」

舞の言葉に、紀伊が首を傾げる。が、特に気にした風もなく、再び前を見つめた。

巨大な「紀伊」の前には、いつそ小柄に見える「奥入瀬」が先行する。それを挟むようにして、二隻の島風型駆逐艦が展開していた。対潜警戒を行いつつ、いざ敵艦隊と接敵となった時は、邪魔な駆逐艦や巡洋艦を打ち払い、「紀伊」の道を開くためだ。

「そろそろ、増速しますね」

「うん、よろしく」

「紀伊」の機関が唸る。極太の煙突からは濛々と黒煙が立ち上り、三百メートル近い艦体が前へ押し出される。「紀伊」が発揮しうる最大速度、二七ノットに合わせて、火力部隊は前進を始めた。

触接中の「瑞山」からは、敵艦隊の情報が逐一知らされてくる。敵艦隊は、戦艦二、軽母一、駆逐三の小規模な艦隊だ。だが戦艦二隻を有しており、油断はできない。しかも、うち一隻は、軍艦色に白銀の迷彩が特徴的な深海棲艦、舞たちが探す「イレギュラー」であることがわかっていた。

過去の索敵からアタリをつけて出撃したが、今回もそれが凶に乗ったらしい。「瑞山」の妖精が言うには、一六インチ連装砲を前部に二

基、後部に三基搭載しているとのことだ。艦型識別表によれば、コードネームは「カガミサキ」、あるいは「アマギゴエ」と思われる。両方とも、この周辺で確認例がある「イレギュラー」だ。

と、ここまで「イレギュラー」の方ばかり問題にしてきたが、実はもう一隻の戦艦も厄介だった。レ級と呼称されるかの深海棲艦は、何をとち狂ったのか、戦艦の砲戦能力に空母の艦載機運用能力を持つ異色の軍艦だった。艦前部に一六インチ三連装砲塔が二基、煙突から後ろは斜めに張り出した航空機発着艦用の飛行甲板だ。

「紅鶴」率いる機動部隊には、すでにレ級を集中的に狙うよう指示を出している。いかに「紀伊」が強力な戦艦とは言っても、一六インチ砲艦二隻を同時に相手取れば、それ相応の被害を覚悟する必要がある。修復のために入渠すれば、出渠までには半月か、長いと一月が掛かってしまう。

機動部隊と火力部隊。両艦隊の連携こそが、作戦成功のカギだ。

その、一番槍となるべき攻撃隊の羽音が、「紀伊」の後方から聞こえてきた。機関の轟々たる音にも負けない力強い音だ。発動機が高速で回すペラは、火力部隊の上空を覆わんばかりに、風を切る美しき旋律を奏でていた。

——頼むよ、妖精さん。

上空を通過していく七十余機の攻撃隊。爆音が木霊する海域を、「紀伊」は進んでいた。雲一つない晴天の空に映える銀翼を、舞は双眼鏡を覗き込んで見守る。紅鶴と白鶴が鍛え上げた妖精たちだ。必ずや、戦果を挙げてくれることだろう。

接敵まで後一時間。これから始まる序曲を、舞はじつと待ち続けた。

攻撃隊から「突撃体勢作レ」の通信が届いたのは、それからすぐのことだった。

◇

艦艇データファイル06

「栗駒」型重巡洋艦

全長・・・一九二・二メートル

全幅・・・一七・八メートル
排水量・・・九二〇〇トン
速力・・・三六・五ノット
五〇口径二〇・三センチ連装砲四基
五〇口径一二・七センチ連装高角砲四基
二五ミリ単装機銃十四基
一三ミリ連装機銃二基

八八艦隊の成立に当たって、海軍を悩ませたのは、戦艦群を支える補助艦艇の建造であった。少ない予算で大量の艦を建造するため、新造艦艇の簡略化と同規格化が進んだ。その結果生まれたのが、栗駒型重巡洋艦である。「砲雷分離思想」によって雷装を廃した本級は、奥入瀬型軽巡洋艦と同規格の艦体を使うことにより、量産性と整備性が格段に上がった。半面、砲力では同時期の米重巡を圧倒するには至らず、あくまで戦艦の補助艦艇という位置付けとなった。

栗駒

栗駒型一番艦。長い黒髪を一本にまとめ、黒の学生服に身を包む。口調がさばさばしているのと合わせり、男顔負けの男らしさのようなものをまとう。性格は、武士道を地で行くような、はつきりとしたもので、仲間のためなら自らの身を顧みない。イメージはいぶし銀。

*

兵器カタログ01

艦上爆撃機 “瑞山”

全長・・・九・三八メートル

全幅・・・一三・九二メートル

重量・・・三八〇〇キログラム

速度・・・四八五キロメートル毎秒

二〇ミリ機銃二挺

七・七ミリ機銃一挺

二五番二発、又は五〇番一発（又は魚雷一発）

本機は、水上偵察爆撃機 “瑞雲” の艦上機型であり、基機譲りのバランスのいい性能を誇る。戦闘機並みの運動性能があり、軽装ならば

防空戦闘も可能としていた。本機の名称が爆撃機にもかかわらず「山」となったエピソードは、慣例に縛られない深津大悟中将（当時航空本部長）の武勇伝としても有名である。

銀翼を低く

機動部隊から飛び立った攻撃隊は、ついに目標を捉えた。

索敵のために放った「瑞山」が、広大な海原に見つけたのは、戦艦二、空母一、駆逐三を擁する機動部隊だった。それから接敵を続けていた「瑞山」の誘導に従って、ここまでたどり着いたのだ。

隊長機から「突撃体勢作レ」——「トツレ」が発せられる。攻撃隊はさらに編隊の間隔を詰め、直掩隊を残した戦闘機隊は、艦隊上空の制空権を奪取するべく、高度を上げて先行していった。彼らの開けた穴から、攻撃隊が突入して、爆弾や魚雷を投じるのだ。

もともと局地戦闘機だけあって、「紫電」改の上昇速度は速い。高度四千を進んでいる攻撃隊から分離した制空隊は、瞬く間に五千へ上りつめ、にわかに慌ただしくなり始めた敵艦隊上空へと突撃していった。

二二〇〇馬力という驚異的な力を発揮可能な「木星」発動機は、その轟音を響かせて「紫電」改を加速させる。自動空戦フラップや強固な防弾構造の採用による重量増加などものともしない韋駄天で、まだ防空体制の整わない敵艦戦隊へと、「紫電」改は次々に翼を翻していった。

航空戦において優位となる高度を取っていたのは「紫電」改の方だ。各々に狙いを付けたジユラルミンの猛禽は、地球の重力に引かれるまま、真つ逆さまに敵艦戦機へと突っ込んでいく。力任せの一航過は、一時に十三機もの敵機を火達磨に変えていた。

下方へと猛スピードで抜けた「紫電」改は、小編隊を崩すことなく格闘戦へともつれ込む。ここで役立つのは自動空戦フラップの存在だ。重戦闘機とは思えない鋭い半径で回り込んだ「紫電」改は、あたふたとするしかない敵戦闘機をいとも容易く撃墜する。鏃のような形の、UFOを思わせる深海棲艦の艦載機が、次々と落とされていった。

それでも、数は深海棲艦の方が多い。敵戦闘機を圧倒するまでいかない「紫電」改だが、優勢であるのは事実だ。そこで何とかして、敵

戦闘機を艦隊上空から引き剥がそうとする。突入する爆撃機や攻撃機にとって、最大の脅威は戦闘機なのだから。

じりじりと、まるで綱引きの駆け引きのように「紫電」改と深海棲艦の戦闘機が争う。お互いがお互いを牽制し、隙あらば機銃のシャワーを浴びせかける。しかし、以降は火を噴く機体が稀になってきた。

そんな中、いよいよ攻撃隊が敵艦隊へと突入し始める。直掩隊の「紫電」改も攻撃隊から離れ、加速した。それに続くようにして、「瑞山」艦爆隊が急上昇、「天山」艦攻隊は逆に超低高度へ降りて散開する。

先に突っ込むのは「瑞山」隊だ。これの錬成は、主に紅鶴が担当している。急降下爆撃による精密爆撃を主任務とし、艦攻隊の突入に先駆けて、敵の輪形陣外縁部を的確に叩くのだ。

輪形陣の外郭を構成するのは、大抵が小型快速の駆逐艦か軽巡洋艦だ。これを叩くには、正確無比な照準が要求された。

先陣を切る分、敵艦隊からの対空砲火も厚い。損害覚悟の突撃だ。もつとも、ただ我武者羅に突っ込むつもりはない。いつでも先手は打っておくものだ。

敵艦隊外縁を固める三隻の駆逐艦の艦上に、多数の火花が散る。先に攻撃隊より分離した「紫電」改が、「瑞山」に先駆けて敵駆逐艦に突撃し、機銃掃射を掛けたのだ。

これが実に利いた。攻撃隊に張り付いていた直掩隊の「紫電」改は、通常型とは違ってより大口徑の三〇ミリ機銃を積んでいた。装弾数は少なく、対戦闘機には向かないが、甲板を更地にするには十分だ。一連射であったが、艦橋とマスト周辺を狙った機銃掃射は、その辺りに集中していたレーダーや射撃管制装置、何基かの機銃をスクラップに変えた。それだけで、「瑞山」隊には十分だった。

八機づつに分かれた「瑞山」が、一本槍となって三隻の駆逐艦に襲い掛かる。開かれたダイブブレーキの甲高い音が引き摺られ、空気が振動した。

対空砲火が飛んでくるが、射撃指揮装置を欠いた射撃など、目隠し

をして矢で鳥を射るようなものだ。あてずっぽうの方向で花開く高角砲弾など、怖くもなんともない。

十分に引き付けて、機体から爆弾が切り離される。誘導索によってペラの回転半径外から切り離された五百キロの爆弾は、風切り音を引き連れて降下していく。それを確認して、先頭機から順に引き起こしを掛けた。

連続した弾着の水柱と、爆弾が炸裂する光。おどろおどろしい轟音が響き渡り、三隻の駆逐艦が爆ぜた。一隻が瞬時に轟沈し、残りの二隻も被害甚大で行き足を止めてしまった。投下爆弾二十四発中命中八発。駆逐艦への戦果としてはまずまずだ。

対空砲火に穴が開いた。その時を虎視眈々と待っていたのは、他でもない、海面をまるで這うようにして敵艦隊へ接近していた、“天山”攻撃隊三十機だ。こちらを鍛えたのは、白鶴だ。対空砲火を避けるため、海面すれすれを飛ぶ攻撃方法。魚雷の必中距離まで、接近できるだけの練度。

狙うのは、十機が空母ヲ級、二十機が戦艦レ級だ。共に elite であるから、防御も対空砲火も厚い。だが片舷から集中的に投雷できれば、大損害を与えることはできる。

ただし、この方法を成功させるためには、より近く——回避運動が困難なほどの至近距離へ、接近する必要があつた。一千では足りない、隊長機は睨んでいる。

ペラや翼端が海面を叩くほどの低空で“天山”隊は進んでいく。後ろに投げつけられた空気が海面を波立たせ、飛沫を散らして白い一本の線になる。それが、合計で三十本。

駆逐艦を攻撃した直掩隊の“紫電”改が、レ級とヲ級にも襲い掛かる。艦橋や舷側で次々と火花が上がり、その度に脆弱な部分が千切れて弾け飛んだ。弾薬に引火したのか、小さな爆発と共に上に吹き飛ぶ機銃座もあつた。

爆弾を投下し終えた“瑞山”も、機銃掃射に加わり始めた。二〇ミリ機銃が雨霰と降り注ぎ、甲板を抉って対空砲をひしゃげさせる。

レ級が猛り狂ったように機銃を撃ち、やたらめったら両用砲を放つ

が、身軽な戦闘機と爆撃機は、これをひらりひらりと躲していた。青白い曳光弾の筋は、虚しく空を切るだけだ。

敵艦隊右舷から、三十機の「天山」が迫る。四翔プロペラが生み出した推力は、魚雷という重量物を抱えていてもなお、「天山」を前へ前へと押し進める。

レ級とヲ級の両用砲群が、一齐に火を噴いた。それまで「紫電」改を追い払おうとしていた箱型の砲塔から、今度は「天山」に向けて、横殴りの暴風雨が吹き荒れる。ただ、狙いは粗い。「紫電」改と「天山」の機銃掃射は、奴らの射撃指揮装置をいくらか封じ込めることに成功したらしい。

それでも、距離が近づけば精度は上がってくるし、そもそも密度が駆逐艦とは比べ物にならない。片舷だけで単装四基四門を指向できるヲ級、レ級に至っては連装六基十二門だ。まるで鋼鉄の壁がそり立つような両用砲弾の嵐が、横に広がって低空を飛び続ける。「天山」隊を包み込む。

飛び散った断片に捉えられた「天山」が、ズタズタになって落ちていく。

爆風に煽られ、海面に激突する機体もある。

運悪くエンジンカウルに両用砲弾が直撃した機体は、痕跡一つ残さず四散した。

だが、残った機体は、そのまま接近を続ける。

この時点で、敵艦までの距離は二千五百。隊長機は、八百での投雷を指示した。

「天山」隊はさらに距離を詰める。両用砲弾の爆風に煽られ、断片の雨が降り注いでも、コースを逸らすことなくただひたすらに海面の真上を進む。

その様は、さながら群れて海面を翔るトビウオのようだ。ゆらめく波間に不似合いなほどの、均一的なフォルム。三機を失っても、なお残った二十七機が横陣を敷き、狙いを付けた二隻の大型深海棲艦へ必殺の魚雷を叩き込まんとしていた。

灼熱の礫のような両用砲弾が超音速で飛翔し、調整された時間で炸

裂して真っ黒い花を咲かせる。断片が四方八方に飛び散り、機体に当たると不気味な異音を発した。

距離二千を切ると同時に、二機の「天山」が火を噴いた。砕けて、引き裂かれた機体の破片が飛沫を上げる。

対空砲火が、両用砲から機銃に変わった。青白い曳光弾が、シャワーのように降り注ぐ。

ただし、弾幕は先の両用砲の時よりもさらに薄い。「紫電」改と「天山」による事前の機銃掃射は、随分と利いていたらしい。航空機にとつて機銃が脅威であるように、機銃座にとつても機銃は脅威なのだ。

「天山」の高度はさらに低くなる。機銃の俯角から逃れるためだ。残った「天山」の上には、機銃弾の絨毯が広がっていた。そこに突っ込んで、以下に弾幕が薄いと言えども、薄皮の「天山」の機体では、ボロボロのボロ雑巾のようになるのが関の山だ。

隊長機が、さらに間隔を詰めるよう指示をする。

距離は、ついに一千を切ろうとしていた。

操作を誤った「天山」が一機、機銃に絡め取られた。

エンジンカウルが被弾し、ペラを叩き折られた「天山」が、推力を失って波間に突っ込む。

これで、残りは二十三機。レ級に十六機、ヲ級に七機だ。

ここまできると、もう一種の根競べである。お互いの存在を賭けた、究極の我慢比べ。

九百。

脱落する機体はない。対空砲火を掻い潜った二十三機は、まるで甲斐の武田信玄が用いた鶴翼の陣のような隊形で、二隻の深海棲艦を押し包もうとする。対するレ級とヲ級も、盛んに機銃を撃つ。なんとしても、「天山」を落とすために。

八百。

その時は来た。残った機体が、隊長機に合わせて魚雷を投下する。魚雷という重量物を手放したことで軽くなった機体が、ふわりと浮き上がろうとする。全機がそれを必死に抑え、機銃の豪雨の下を進む。

ここで浮き上がれば、それはすなわち撃墜を意味するのだから。

二十三機の“天山”の後ろからは、それぞれが放った魚雷の白い航跡が追隨する。

低空飛行を続けていた“天山”は、敵艦の二百手前で機体を上げる。全機がレ級とヲ級の艦上をフライパスした。

その後方から、魚雷が迫る。計二十三本。航空機から放たれる人口の長槍は、海中を疾走して深海棲艦の横腹を狙う。回避運動を行っても、必ず一発は当たる射線、しかも距離八百からの投雷だ。避けられる道理がなかった。

白い巨塔が、二隻の右舷にそびえ立つ。連続した魚雷の炸裂と、圧倒的な瀑布。船にとって恐怖の象徴と言える魚型水雷の群れは、容赦なく深海棲艦のどてっ腹に食いつき、喰い破った。その度に浸水が起こり、艦を傾ける。

最終的な命中弾数は、ヲ級に三発、レ級に六発。両艦とも、撃沈確実と言えた。

攻撃隊全体を指揮する“天山”隊長機から、この情報は機動部隊、そして火力部隊に伝えられた。

残存機が追いつがる敵機から逃れ、編隊を再度組んで帰投しようとした時。

その爆発的な光は、水平線で沸き起こった。その後立ち上る、褐色の煙。敵艦隊を捉えた“紀伊”以下の火力部隊が、残った敵艦——
——“イレギュラー”に向けて発砲した瞬間だった。

◇

艦艇データファイル07

“奥入瀬”型軽巡洋艦

全長・・・一九二・二メートル

全幅・・・一七・八メートル

排水量・・・九二〇〇トン

速力・・・三六・五ノット

六〇口径一五・五センチ三連装砲四基

五〇口径一二・七センチ連装高角砲四基

二五ミリ単装機銃十四基

一三ミリ連装機銃二基

奥入瀬型は栗駒型の準同型艦と言える軽巡洋艦で、二〇・三センチ連装砲とほぼ同規格の一五・五センチ三連装砲に主砲を換装している以外は、特に差異は存在しない。それまでの海軍の軽巡洋艦——五五〇〇トン級と違い、本級には魚雷発射管が搭載されておらず、砲戦に主眼を置いた軽巡洋艦となっている。「砲雷分離思想」の「砲」を担当する本級の真価は、「雷」を担当する重雷装巡洋艦と組み合わせられることよって発揮される。

奥入瀬

奥入瀬型一番艦。明るい茶髪のポニーテール。性格は快活明朗、そして面倒見もよい。大らかというより無頓着な栗駒や、駆逐艦を焚き付けてばかりの九頭龍に代わり、タウイタウイ水雷戦隊の指揮を執る。もつとも、性能的に島風型には追いつけないので、戦闘時は支援に徹し、実質的な指揮は龍風に任せている。実は煎餅派。

巨砲咆哮す

機動部隊の攻撃隊から戦果が届いた時点で、「紀伊」から発艦した「瑞雲」艦上偵察爆撃機は、水平線の向こうの敵艦隊——否、残った「イレギュラー」一隻を捉えていた。そこから送られてくる諸元を仮入力した紀伊は、その姿が水平線上に出現するのをじっと待っていた。一瞬でも姿が見えれば、その時点で射撃諸元が完成する。

「紀伊？」

「わかってます。頃合いを見て、対話を」

「うん。よろしく」

さあ、ここからが難しい任務だ。

「イレギュラー」の調査——具体的には、鹵獲が目的の戦闘だ。これほど難しいものもない。

敵艦から戦闘能力を奪ったうえで、沈めてはならないなど。戦闘艦の意味を問われそうだ。それでも、やらなければならぬ。

彼女たちと「対話」するために。

「っ！敵艦見ゆー！」

艦橋頂部、海面から五十メートルはあろうかという位置に据えられた「紀伊」の測距儀が、水平線上に突き出る敵艦のマストの先端を捉えた。目のいい観測妖精には、それだけで十分だった。

「諸元修正よし。砲戦準備完了」

指示を。目で促す紀伊に頷き、舞は居住まいを正した。

「砲戦始めっ！」

甲高いブザー音が艦上に鳴り響く。甲板からは、すでに全ての妖精が艦内へと退避していた。「紀伊」の砲撃時に走り抜ける衝撃波は、もろに受けるには危険すぎる。

「撃っっ！」

紀伊が号令する。一拍を置いて、左舷へと指向していた「紀伊」の主砲が、第一射を放った。

百雷などと、生易しいものではない。世界から一瞬のうちにあらゆる音が消え去り、砲口から生じた特大の砲炎が、視界を真っ白に染め

る。等速度的に広がった衝撃波は海面を容赦なく叩き、クレーターを形作った。五一センチ砲を扱うために取られた四〇メートルの横幅も、その衝撃を完全に吸収することはできない。

「紀伊」に三基搭載されている五一センチ三連装砲は、最初から全門斉射だった。普通は各砲塔一門ずつの交互撃ち方を経て斉射へと移行するのだが、紀伊はあえてそれを省いた。これには明確な理由がある。

上空で弾着観測を行う「瑞雲」には、「紀伊」艦上では観測することのできない気象情報を計測するための機器が搭載されている。砲弾が高空域を通過する際に受ける気圧や風速の影響を、この機器を用いて計測し、射撃諸元に組み込むことができた。

高高度気象観測射撃。紀伊はそう呼んでいる。現在このシステムを用いた弾着観測射撃を満足に行えるのは、「紀伊」のみだ。

艦上で観測できない情報を加えることができるので、射撃精度は格段に向上する。これまでの訓練では、第一射から命中弾を得る確率が五十パーセント、夾又は八十パーセントだ。弾着修正の必要がほとんどない。

「紀伊」の発砲に、「イレギュラー」——コードネーム「アマギゴエ」も気づいた。慌てて射撃諸元の算出をしているようだが、三万五千の距離で砲戦を始めた「紀伊」に対し、その砲弾が届くことはない。

「アマギゴエ」の搭載する一六インチ砲の射程距離は、最大でも三万五千。最大射程で放たれる砲弾が命中する道理はなかった。

「紀伊」の第一射が落下するまでは、九十秒近い時間がかかる。音速の二倍で撃ち出された砲弾は、その運動エネルギーを位置エネルギーへと変換しながら、物凄い速さで放物線を登っていく。その高さは、富士山をゆうに超えた。

「相変わらず、時間かかるねえ」

「待つしかありませんね」

舞も紀伊ものん気なものだ。

『提督、先行します』

「うん、よろしく。決着するまでは適度に距離を保って」
『了解です』

「紀伊」に付き従っていた「奥入瀬」以下三隻が、速力を上げて離れていく。水平線の先、正に今、「紀伊」が撃ち合っている「アマギゴエ」に接近するためだ。

「弾着、今！」

紀伊の声と同時に、水平線の向こうで水柱が上がるのが見えた。もつとも、特大の高さがある五一サンチ砲弾の噴き上げる水柱の、その先端部分ぐらいしか見えないが。

観測機から報告された命中弾は二発。初弾から敵艦をしつかり捉えている。

五一サンチ砲弾の威力は絶大だ。一步間違えば、例え「イレギュラー」と言えども瞬時に轟沈してしまう。的確に弾着の成果を見ながら、射撃を続けるしかない。そのためには、多少間延びした射撃となるのも致し方なかった。

本来の斉射間隔の二倍以上の時間をかけて、「紀伊」の第二射が放たれる。同じ頃、「アマギゴエ」から交互撃ち方の第二射が放たれた。

お互いの砲弾は、遥かの高空で交錯し、それぞれの目標へと落下していく。

「弾着、今！」

「紀伊」の第二射が落下する。今度の命中弾は一発。敵艦はかなりの打撃を受けているみたいだが、頑強な「イレギュラー」らしく、この程度では沈黙しない。

と、その時。舞も紀伊も、異様な音が迫ってくることに気付いた。反射的に頭上を——敵艦の第二射が降ってくる方を見た。

弾着の水柱が上がる。三本、そして残りの二発は、「紀伊」の前甲板に火柱を上げた。八万トンを超える「紀伊」は、その程度ではびくともしないが、それでも衝撃が襲って艦体を揺らした。

とつさに艦橋のへりに掴まって衝撃をやり過ぎた舞は、水平線の向こうにいる敵艦を睨んだ。

「・・・さすがは、『イレギュラー』、ってところね」

恐ろしい練度だ。主砲の最大射程距離ギリギリで撃っているのに、たった二射で命中弾を得るなど、並大抵の艦では不可能だ。

これが『イレギュラー』。凶悪な深海棲艦。

『紀伊』の第三斉射が砲声を上げる。横方向への動揺の中で艦橋の窓がビリビリと打ち震える。圧倒的なまでの砲戦火力。それなのに、言いようなない恐ろしさを、舞は感じていた。

『紀伊』の防弾装甲は、対五センチを想定しており、その厚さもかなりのものだ。そう易々と貫通される代物ではない。しかしこの距離で飛んでくる砲弾というのは、空気抵抗でエネルギーが消費されているとはいえ、ほぼ真上から降ってくる。その威力は馬鹿にならない。

それに、いかに堅牢な『紀伊』といえども、艦首や艦尾には非装甲区画がある。もしそこに、真上から砲弾が飛び込めば、艦の奥深くで炸裂して甚大な被害を及ぼすかもしれない。

「大丈夫です、提督。『紀伊』は沈みません」

舞の心配を悟ったのか、紀伊は静かに立っている。自信に溢れたその姿に微笑む。

「その点に関しては、全然心配してないよ」

紀伊は頷く。

『紀伊』の第三斉射が落下した。およそ二千キログラムもある砲弾が九発、『アマギゴエ』を包み込み、命中弾炸裂の光と炎を巻き起こす。甲板をいとも容易く喰い破った徹甲弾が、その破壊力を十分に発揮して、艦内をズタズタにする。機関部に被害が出たのか、『アマギゴエ』の速力が見るみるうちに下がっていった。

入れ替わりに、『アマギゴエ』の第一斉射が轟音を引きずって落下する。斉射間隔は三十秒。つまり『紀伊』が『アマギゴエ』の被害を見ながら斉射をする間に、およそ三回の斉射を繰り出す。

命中弾は二発。二発ともバイタルパートに命中したため、戦闘航行に支障はなかったが、高角砲群に飛び込んだ一発が、二基の一二・七センチ連装高角砲を吹き飛ばし、更地に変えた。

“紀伊”が第四斉射を放った後には、“アマギゴエ”の第二斉射が降り注ぐ。今度は一発。二番砲塔の正面防盾で火花が散り、弾かれた砲弾が一拍後に炸裂する。

三十秒後には、第三斉射が襲い掛かってきた。損害を確認しながらのこちらと違い、向こうは遠慮会釈のない砲撃を繰り返す。二発が命中弾となり、うち一発は後部の航空作業甲板を貫いて盛大に爆ぜた。後方から衝撃が襲い来る。

しかし入れ替わるようにして、“紀伊”の第四斉射も“アマギゴエ”を捉えた。今度も命中弾は二発。巨大な爆炎が水柱の合間に噴き上がり、頑強な“アマギゴエ”の甲板を焼く。否、すでに行き足はほとんど止まり、艦後部がどす黒い煙で覆われていた。

それ以降、“アマギゴエ”が新たに発砲することはない。“紀伊”の五一センチ砲弾は、わずかに四度の斉射で“イレギュラー”を沈黙させた。後は、細心の注意を払い、鹵獲を試みる。

“アマギゴエ”が最後に放った斉射弾が、“紀伊”の周囲に落下する。が、速力が落ちたことによる相対速度の誤差を見誤ったらしく、その砲弾は全てが“紀伊”の前に弾着して巨大な水柱を屹立させる。もろに艦首を突っ込んだ“紀伊”の前甲板に、局所的な大雨がバラバラと降り注いだ。

「『イレギュラー』沈黙。沈没はしていないみたいです」

「了解。奥入瀬、“彼女”に呼びかけつつ、消火活動をお願い。できるなら対話がしたい」

『やってみます』

さあ、本当の正念場はここからだ。

砲身を下げた“紀伊”の三連装砲塔が、再び正面を向いて固定される。「敵艦を撃沈せず無力化する」という困難というよりも無理難題と言った方がいい任務をひとまずやり終えたことに安堵して、額の汗を拭った。

この先はどうなるかわからない。誇り高き“彼女”は、こちらとの接触を良しとせず、自沈する道を選ぶかもしれない。だが“彼女”は、人間の及ばないほど理性的だ。舞としては、その“彼女”の理性

を信じる他なかった。

“紀伊”が取舵を切る。ゆつくりと艦首が振られ、今しがた砲火を交えたばかりの“アマギゴエ”へと向かっていく。

“紀伊”の前方で“アマギゴエ”への接近を続ける“奥入瀬”以下の三隻に対して、砲弾が降り注ぐことはない。逆にしばらくした頃、辛うじて残っていた両用砲の類が、その方針に俯角をかけた。交戦の意思がないことを示している。ちなみに、五基あった主砲塔は、その全てが爆砕、または擱座していることが、上空から観測している“瑞雲”から知らされた。

『「イレギュラー」より返信ありました。乗艦を許可するとのことです』

奥入瀬からの報告に、舞と紀伊は顔を見合わせる。

深海棲艦という存在の探求が、始まろうとしていた。

◇

艦艇データファイル08

“島風”型駆逐艦

全長・・・一二九・五メートル

全幅・・・一一・二メートル

排水量・・・二五六七トン

速力・・・四〇ノット

五〇口径一二・七センチ連装砲三基

六一センチ五連装魚雷発射管三基

二五ミリ連装機銃二基

一三ミリ連装機銃一基

甲型駆逐艦に続く、艦隊型駆逐艦の究極形として計画されたのが、丙型駆逐艦の島風型だ。甲型で指摘されていた速力の不足を補うために、高温高圧の新型機関を採用しており、公試時には最高速力四〇・九ノットを叩きだしている。雷装についても、次発装填装置こそないものの、十五射線という海軍最大の発射雷数を誇り、名実ともに夜戦の切り札として、高速水雷戦隊の一翼を担うことが期待される。

龍風

島風型二番艦。銀の長髪を顔の左でサイドテールにしている。基本的に自由奔放で、飄々とした性格。島風型で構成される第一特設駆逐隊を指揮する。

霜風

島風型三番艦。ポニーテールをリボンで結んでいる。威勢の良い性格だが、たまに勢いを削ぐようなおやじギャグを発する。

清風

島風型四番艦。黒の長髪で、制服の上からカーディガンを羽織る。一特駆では最も落ち着いた性格。男性の理想像として栗駒を慕っている。

荒風

島風型五番艦。茶髪を肩口の辺りで揃えている。江戸っ子気質で霜風に負けず劣らず威勢が良いが、どちらかと言えばツツコミ役。

早風

島風型六番艦。黒の長髪を右肩から流している。沈着冷静そのもので執事のような喋り方をするが、実はキャラを作っている。黒ペンが相棒。

綾風

島風型七番艦。青みがかった長髪で、後頭部に大きなりボンをしている。戦闘に対してヤンデレの気があり、戦闘に連れて行ってもらえないと半日拘束される。

異端者たち

煤で黒くなった甲板。広大な甲板の上では、まだ所々で炎が燻っている。大量の海水を飲み込んだのだろう、乾舷も随分と低くなっていた。

ラツタルを前甲板へと上りきった舞と紀伊は、「アマギゴエ」の艦上を見渡して、目的の「彼女」を探していた。

浸水具合から見て、沈む可能性も否定できない。話をするならば、早い方がよかった。

「そんなに慌てるな。しばらくは沈まない」

低い音程、まるで作り物のような声は、辛うじて女性とわかる。声のした方を、舞と紀伊は見上げた。摺座して旋回不能となった第二砲塔、その天蓋の上に、まるで闇夜をそのまま衣服に仕立て上げたような、漆黒のロングドレスをはためかせる女性が立っていた。

肌は向こうが透けて見えるのではと見紛うばかりの白。爛々と輝く深紅の瞳は、不吉の象徴とされる赤い月を思わせる。銀髪とも白髪ともつかない長い髪に、黒いリボンがたなびいていた。

彼女は天蓋から飛び降りる。思わず息を呑むが、彼女の体はまるで重力に逆らうかのように、フワリと甲板に降り立った。丁度、千尋のような挙動だ。

「日本海軍タウイタウイ泊地所属、『T・T独立艦隊』提督の磯崎舞です。乗艦許可、ありがとうございます」

「同じく、紀伊です」

甲板をこちらへ歩く彼女に向けて、二人が自己紹介をする。ピタリと足を止め、こちらを値踏みするように目を細めた後、彼女は口を開いた。

「それは、いわゆる自己紹介というものか？ならば私も、何か自らを定める呼称を、お前たちに教えるべきだな」

流暢な日本語を、彼女はしゃべる。これは、今までの「イレギュラー」との接触でわかつていたことだ。

理由はわからない。いくらか推測はできるが、残念ながらそれを追

求する時間が、過去の接触ではなかった。

——その辺りも、今回触れられるといいんだけど。

それは、あくまで彼女次第だ。

しばらく考えるようにした後、彼女は自らをこう名乗った。

「アスチルベ」

——花言葉は、自由。

日本の花言葉に変換すればそうなる。五月十二日の誕生花だ。

「人類の暦で、その花が誕生花の日。私の意識は目覚めた」

ついて来い、そう言うように目線で示して、彼女——アスチルベは身を翻す。舞と紀伊も、それに従った。

「花言葉、『自由』と言ったか。何ものにも縛られず、己を持って生きていくこと。その言葉が何となく頭に残っていた」

彼女が招いた先は、まるでそこだけが何事もなかったかのように小綺麗な、円形の机だった。机の上には、ご丁寧にも紅茶の準備がされている。

「人類は、客人が来た時に茶を出すのだろうか？ 貰いものだが、品質は保証する」

誰から貰ったのか。今そこに踏み込むことは、許されていない。

アスチルベに勧められるまま、二人は席に着く。非常に手馴れた仕種で、アスチルベは紅茶を淹れ始めた。

「随分慣れてきているのね。よく飲んだの？」

舞の質問に、アスチルベの頬がわずかに緩んだ気がした。

「ああ。海の上は静かだが、何かと暇だな。紅茶はいい思索の友だ」

もつとも。アスチルベはそう言って、側に置いてあつた茶葉入れを取り上げた。様子からして、中身はまだまだ入っている。

「折角新しいものを調達したが、無駄になっちゃったな。もう飲むこともあるまい」

一切の感慨を感じさせない口調だった。自らが滅びゆくことを受け入れているかのような、美しくも危ない喋り方。舞の本能が、それを敏感に感じ取っていた。

「例え艦体を失っても、貴女は生きられるはず。私たちと一緒に来る

「気はない？」

アスチルベの双眸が、わかりやすく見開かれた。それから一際大きな声を上げて笑う。

「あつはは。なるほど、そういう考え方をするのか」

ひとしきり笑ったアスチルベは、それでも何ら表情を変えずに、きっぱりと言い放つ。

「だが、論外だ。人類にとっては、艦など単なる道具だろうが、我々にとっては第二の自分だ。所詮、私は魂に過ぎない。艦体あつてこそその私だ」

アスチルベはゆっくりと、二人分の紅茶を差し出す。

「どうぞ。上手く淹れられた」

柔らかな湯気が立ち上る。ティーカップも、質素で奥ゆかしい。香りにふさわしい気品があつた。

舞と紀伊が口付ける。それを満足そうに見つめていたアスチルベは、自らもカップを傾け、琥珀色の液体を楽しんでいた。

カタリ。三人がカップを下ろす音が重なり、時折風の吹き抜ける艦上に響く。脱いだ帽子が飛ばされないように、舞は手で押さえた。

「二つ確認したい」

先にアスチルベが口を開いた。

「対話が目的なら、なぜ最初からそうしなかった？この艦隊を攻撃した意味はなんだ」

感情は読み取れない。事実を淡々と述べ、疑問の確認を求めているだけ。それ以外の余計なものは、微塵も含まれていなかった。

微笑を湛えて、舞が答える。

「最初から対話と呼び掛けたら、貴女は応じた？」

アスチルベが口角を吊り上げた。

「答えは否、だな」

「それに、他の深海棲艦がいては、対話の障害になるので」

「撃沈した、と？」

「気に障ったのなら、謝罪します」

舞の申し出に、アスチルベは笑って首を横に振る。

「その必要はない。余計なことを訊いたな」

「本題に入りましょう」

紀伊が口を開く。

「私たちは、艦娘と深海棲艦、その存在の根源を探しています」

「なるほど。興味深い」

「現在、艦娘同士、そして艦娘と人間の間では、話ができます。ですがこと深海棲艦については、その情報を得ることは困難でした。そんな時、私たちは貴女たちを見つけました」

アスチルベは納得したように頷いた。

「艦娘と似たような存在を持つ、我々『異端者』——お前たちが『イレギュラー』と呼んでいる、人類と対話が可能かもしれない深海棲艦」

「やはり、深海棲艦なんですね。貴女がたは」

再び紅茶に口を付けながら、アスチルベは舞に答えた。

「深海棲艦にも、色々いる。人類を封じ込めようとする『執行者』、それを指揮する『統制者』、そして我々『異端者』。個性とやらは、艦娘たちほど強くはないが、な」

だが、なぜだ。カップを置いたアスチルベが、二人の方へと体を傾けてきた。

「なぜ、我々を選んだ？人類全体ではないにしろ、少なくともお前たち『T・T独立艦隊』は、深海棲艦全体が艦娘と似たような存在を持っていることを知っているだろう？確かに、駆逐艦級なんかは、人類とは似ても似つかないし、実際こうした話を面と向かってできるかは怪しい。だが、戦艦級や『統制者』は、明らかに人型だ。私も実際に話したことはないが、接触はできるだろう？」

逆に問いかけたアスチルベに、舞も体を乗り出して答える。今この時だけは、彼女が弱冠十六歳の少女だなどと、誰も思わないであろう。「貴女たちが、『深海棲艦』という存在を探求しているから」、です」

端正なアスチルベの眉が、わずかにピクついた。

「私たちにとって、貴女たちをこの海域から出すことは危険すぎます。ですからタウイタウイには泊地が置かれ、常時貴女たちを乙海域から

出さないようにしています。ですが今まで、貴女たちは積極的にこの海域から出ようとすることはなかった」

冷酷なまでのアスチルベの視線。それを真っ向から受ける舞の視線。少し温くなった紅茶の上で、二つの視線がぶつかり合う。

「何があるんですか？この海域に」

「いや、何もなかった」

かぶりを振ったアスチルベに、舞の猛攻は止まらない。

「それなのに貴女たちは、ほとんどがこの海域に留まり続けた。それは、私たちと接触するためではないですか？」

少女と深海棲艦。二つの視線が絡み合い、火花を散らす。紀伊もその様子を静かに見つめていた。

しばらくの沈黙。やがてアスチルベが、重々しくその口を開き始めた。

「深海棲艦の存在。それを探求するために生まれたのが、我々『異端者』だ」

アスチルベは語る。

本来深海棲艦は、対となる青い海の戦艦、その操縦者たる艦娘ほど、自覚というものを持ち合わせていない。しかし人類との戦い、そしてその後の艦娘との戦いにおいて、自らが戦う意義に疑問を呈するモノが、特に『統制者』を中心として現れ始めた。

なぜ戦うのか。その答えを求め、通常の深海棲艦よりも高い『自己』を持ったモノたち——『異端者』が生まれた。

「存在の探求は、始祖を辿ること。我々『異端者』が真っ先に目をつけたのが、お前たちが『Z海域』と呼ぶ、この海域だ。我々は、この海域に、深海棲艦の起源に通じるものがあると考えた。だから特に、厳重に封鎖した」

だが、何も見つからなかった。アスチルベは嘆息とも取れる溜息を吐いた。

「深海棲艦の起源に繋がるようなものは、何も見つからなかった」

「代わりに、私たちと出会った」

紀伊の言葉に、アスチルベはコクリと頷いた。

「驚いたが、同時に納得もした。本来、我々『異端者』というモノは、深海棲艦の中には存在しなかった。いわば異物だ。均衡した世界の片側に、我々は現れてしまった。だから、お前たちが産まれた。世界の均衡を保つために」

深海棲艦の存在を探求する者たち。『異端者』、そして『T・T独立艦隊』——『本来存在しない』はずのBOBたち。二つの異物が、艦娘と深海棲艦の戦いに、深く食い込み、根差している。

「これまでにわかったことは二つ。少なくともこの世界は、我々とお前たち、二つの異物を許容しているということ。つまりは、自らの存在の探求を、否定はしていないということだ」

そして、もう一つ。

「深海棲艦と青い海の戦艦は、元は同じ——非常に近い存在だったということだ」

西に傾きだした太陽の下、荒々しいまでの巨艦が、今まさに波間に没しようとしていた。堅牢な『イレギュラー』——『アマギゴエ』“とはいえ、被弾による浸水には耐えられず、ついにその限界を迎えたのだ。

なぜ、深海棲艦はブルーアイアンの強制活性化ができないのか。それはよくわかっていない。精神同調の差異がもたらすものなのか、あるいはブルーアイアンの扱いの違いなのか。残念ながら、艦娘と深海棲艦を比べる術はなかった。理論的には可能でも、実際問題として、ほぼ完全な状態での、両者の比較などできるはずがなかった。

奴らは、敵なのだから。

だが、アスチルベはこう言っていた。

——「我々には、自己という観念が薄い。ゆえに艦体とのシンク口は単調的で平坦だ。自己が持つ意思に相当する、起伏がないからな」

意思、感情。それらが精神同調の強弱に起伏をもたらすことは、人類も知っている。艦娘が持つ、自己、個性。それらが孕む感情の起伏が、ブルーアイアンの強制活性化という禁じ手を可能にしているのだ

はないか。

“アマギゴエ”の右舷に、巨大な水柱が出現した。“紀伊”と行動を共にしていた“島風”型の二隻が、介錯のために放った酸素魚雷だった。自沈ではなく、あくまで敵の手によって沈められることを選んだ。アスチルベの、艦としての矜持が、そうさせたのだろうか。

急速に傾く“アマギゴエ”の艦上に、こちらを見つめて立っているアスチルベの姿が見えた。流れる風に、黒いスカートが揺れている。陽光を浴びて輝く髪が、神々しいまでの美しさを漂わせていた。

「・・・アスチルベ、沈みます」

紀伊がぼつりと報告する。舞は手に持った紅茶の茶葉入れを握りしめた。

——「我々が出会った記念だ。最後に、実に楽しい時間を過ごさせてもらった」

アスチルベには、人間のそれと変わらない、清々しいまでの笑顔が浮かんでいた。

“アマギゴエ”が沈んでいく。その艦影と共に、アスチルベの姿もまた、たゆたう海へと消えていった。

横から差す光の中で、舞と紀伊は、消えゆく彼女に敬礼を送った。

◇

艦艇データファイル09

“アマギゴエ”

全長・・・二五二・三メートル

全幅・・・三二・三メートル

排水量・・・四万二〇〇〇トン（推定）

速力・・・三〇ノット

四五口径一六インチ連装砲五基

五〇口径六インチ単装砲八基

四〇口径五インチ連装高角砲六基

二五ミリ機銃多数

乙海域北東部で確認される“イレギュラー”であり、八八艦隊計画における天城型巡洋戦艦に酷似している。もつとも、防御面や射撃照

準装置は大幅に強化がなされているらしく、操縦者たるアスチルベの技量も相まって、主砲の最大射程付近でも最小限の弾着修正で命中弾を得ることができるとのこと。

決断を下す

陽の沈んだ執務室。全ての執務を終えても、舞は静かに、執務机の上で手を組んでいた。その視線の先には、黒い表紙の書類がある。一ヶ月半前、イムヤがわざわざ持ってきてくれた、トラック攻略作戦——『IF作戦』の作戦指令書だ。

「・・・まだ、残ってたんですね」

ゆつくり執務室に入ってきたのは、同じく執務を終えた紀伊だった。夕御飯でも知らせに来たのだろう。

「ちよつと・・・考え事」

「あまり根を詰めすぎるのはよくありませんよ？」

心配そうに言った紀伊に、舞は薄く笑った。

「もう、夕御飯？」

「はい。準備できてます。後は提督だけですよ」

「そっか」

それでも舞は、まだ執務机を動かなかった。代わりに大きく仰け反り、背もたれに体重を預ける。

一週間前の、アスチルベの姿が思い浮かんだ。執務机には、あの時の茶葉入れが置かれている。彼女が舞に託した、想いだ。

「・・・行くしか、ないんだよね」

「・・・トラック攻略戦、ですか」

「そう」

現状、強力な「イレギュラー」と戦うことができるのは、舞たち『T・T独立艦隊』だけだ。その「イレギュラー」がトラック近海に展開している以上、舞たちが出撃して叩くしかない。

——でもそれは、皆が誰かの目に触れるかもしれない、つてこと。できれば避けたい。けれども考えてみれば、いつまでもここに閉じこもることなどできないのだ。いずれ、紀伊たち「存在しない」はずの艦娘たちは、外界へと出ていかなければならない。

深海棲艦の存在の探求が、このZ海域だけに留まらないのであれば、いずれ『T・T独立艦隊』の手には負えなくなる。

「イレギュラー」がいつまでこの海域に留まるのか——いつまで、舞たちと関わるつもりなのか。それは誰にもわからない。決めるのは「イレギュラー」たちだ。

「・・・行こう」

舞は決断する。

通常艦隊で「イレギュラー」と対峙するのは危険だ。

行先はトラック。「T・T独立艦隊」は、初めてZ海域を出る。

「えーっと、皆に重大発表がありまーす」

夕食もほとんど終わった頃。全員の前に立った舞は、開口一番そう言った。

「重大？」

「発表？」

フォークに巻いたパスタの最後の一口を口に運びながら、龍風と霜風が反復する。食後のティータイムを楽しんでいた鞍馬と栗駒も、こちらを見遣った。

咳払いを一つ。

「今回、我がタウイタウイ泊地は、『IF作戦』に参加することにしました」

食堂から、カタリとも音がしなくなった。その場にいた全員が、舞に視線を送っていた。

「「・・・えええっ!?!」」

次の瞬間、全員が驚きの声を上げる。調理場の奥で後片付けをしていた貴子も、何事かとこちらを覗き込んでいた。

「つ、つまり、それはその・・・この海域を、出るってこと?」

雲仙がおずおずと尋ねる。舞は黙って、その首を縦に振った。

「だ、大丈夫なのかなあ。私たちが、この海域の外に出て」

「そこはまあ・・・気にしない方向で」

舞は曖昧に答える。

「もちろん、できるだけ見つかからない航路を取るけど。絶対に発見されないって保障はないかなあ」

そもそも、アメリカ側の軍事監視衛星が生きていれば、すでに『T・T独立艦隊』が発見されている可能性が高い。青い海の戦艦としては『イレギュラー』といえる『T・T独立艦隊』の艦艇たちを大っぴらにしているという事は、アメリカという国は彼女たちを許容するつもりはないということだろうか。

「『IF作戦』ということは、トラックですか」

鞍馬が言う。

「トラックを確保する作戦の、重要性は理解できません。ですがなぜ、私たちが参加する必要がある？理由を聞かせてほしいわね」

「うん、それはね」

舞は机の周りに集まるよう目配せする。全艦娘が舞の周りに群がり、その目を見つめる。舞は持ってきた封筒——イムヤが横須賀から持ってきた二式大艇撮影の画像を保管していた封筒を出して、中から写真を取り出す。机の上に並べたそれを見て、全員が重い沈黙を共有した。

写真に写るのは、彼女たちが戦う特殊な深海棲艦。長砲身一六インチ砲を四連装で三基、艦の前部に集中配備した、特徴的な艦影。白銀と軍艦色の迷彩と、前甲板の紋章。

「コードネームは『コマツグミ』。トラックの南で撮影された写真よ」

「・・・出ちゃったんだ、『イレギュラー』が」

このことが持つ意味を、その場の全員が知っている。

通常のBOBたちが相手取るには危険すぎる相手だ。異様に高い練度は、時として最大射程付近での命中弾という信じがたい事態を引き起こす。

特に、この『コマツグミ』は危険だ。同航戦はもちろんのこと、反航戦や丁字戦においても高い火力を発揮する。唯一の攻略法と言えるのが後方からの攻撃だが、そもそも後方から追いかけるの砲撃など、困難以外の何ものでもない。

だが、舞たちならできる。『紀伊』は正確無比な高高度気象観測射撃を用いて、そして『雲仙』と『鞍馬』は高速力を生かした機動戦

で。撃破する方法も、それを実現する性能と練度もある。

今、トラック沖の“コマツグミ”と戦えるのは、舞たちしかないのだ。

「それに、私たちが南から接近すれば、『I F 作戦』主力部隊と合わせて、トラックの敵艦隊は二方向に戦力を割かなきゃいけない。確かな側面援護になるはずよ」

戦術的な利点も、舞は語る。それでもその場の、重い空気は変わらなかった。

いわば彼女たちは、箱入り娘のそれと変わらない。Z海域という狭いところに閉じこもり、外の世界を知らない少女たち。

それでも、いつかその殻は破らなければならない。いや、近いうちにきつと破られる。舞にはそんな予感があった。

「・・・行こう」

最初に口を開いたのは、雲仙だった。いつになく難しい顔をして写真を眺めていた彼女は、真面目な表情で周りに頷く。

「やれるのは私たちしかないんだから」

賛同の声が上がった。島風型の駆逐艦たち、九頭龍、白鶴、紅鶴、奥入瀬、栗駒、鞍馬。事前に、三瀬にも賛同を取り付けている。

「それに、訊いてみたいこともたくさんあるしね。なんで、この海域を出たのか、とか」

龍風が言った。

ここに、『T・T 独立艦隊』の『I F 作戦』参加が決定した。

◇

最終的に、『I F 作戦』に参加するBOBは以下の通りとなった。

・ 第零別働艦隊

磯崎舞特務大尉

“紀伊”、“雲仙”、“紅鶴”、“白鶴”、“栗駒”、“九頭龍”、“龍風”、“清風”、“早風”、“綾風”

艦隊は、パラオ泊地に集結しつつある主力艦隊に合流するわけにもいかず、あらゆる目を避けてトラック環礁の南方を目指していく。

『T・T 独立艦隊』の、誰に語られることもない戦いが、幕を開けた。

トラツク沖

トラツク沖の夜明けを、舞は「雲仙」の艦橋で迎えた。

昇った朝陽が海面を赤々と照らしだし、艦首で割れる波がキラキラと輝く。シャープな「雲仙」の艦影を、飛び散る水飛沫が引き立てた。

「んーっ。やっぱり、海の上で迎える朝は格別だね」

仮眠を取った雲仙が、艦橋の窓から差し込む陽差しに向かって大きく伸びをする。彼女の言葉に、舞も大きく頷いて同意を示した。

「まさに、水平線から昇ってくる感じだからね」

「綺麗でしょ？」

ひとしきり深呼吸をした雲仙は、艦橋内所定の位置に歩み寄り、ピツと立つ。艤装を背負い、精神同調の準備に入った。

「それじゃ、提督」

「うん、よろしく」

「にしし、任せてって」

雲仙はイタズラっぽく笑って、目を閉じ、精神同調に入った。

「ブレイン・ハンドシエイク」

瞬間、唸る「雲仙」の機関の調べが、明らかに変化した。煤煙を吐き出し続ける煙突の下、強力な機関が轟音を上げるさまは、まるで戦いを前にした獅子が威嚇の咆哮をしているかのようだった。

やがて、雲仙が目を開く。「雲仙」と一体となった彼女には、果たしてこの世界がどのように映っているのだろうか。

「精神同調完了。システム正常、各部戦闘準備よし」

と、すぐに入電があった。

「『紅鶴』から入電。『索敵機、発艦準備完了』」

「返信、『索敵機発艦始め』」

舞の指示を受けて、雲仙が後続の空母に指示を伝える。数分の後、二隻の空母から索敵機となる「瑞山」が飛び立った。

「・・・難しい任務になるね」

それぞれの砲口へと飛び去っていく索敵機を見つめて、舞がポツリ

と呟いた。

舞たちの現在位置は、トラックの南六百海里ほどの位置だ。目的は、この近海に展開する、〃コマツグミ〃を中心とした艦隊の捜索と、これの撃滅。ただし、守らなくてはならないことがある。

トラック沖で作戦行動中の日本艦隊に、自らの、そして、イレギュラー〃の存在を悟られてはいけないこと。

これを守るためには、細心の注意が必要だった。

日本艦隊の作戦計画書は、イムヤに手渡されている。〃コマツグミ〃との戦闘をトラック南方に限れば、接触することはまずないはずだ。

「やっぱり、夜戦で決めるの?」

同じようにして索敵機を見送っていた雲仙が、何気なく尋ねる。

「まあ、一番派手に動けるのは夜戦だからね。日中は、やっぱり空の目があるし」

「じゃあ、どうするの?」

「〃紅鶴〃と〃白鶴〃には、第一次攻撃隊でトラックの港湾施設を叩いてもらう。これで、トラック環礁の深海棲艦は、こっちの存在にも気づくはず。その上で、改めて〃コマツグミ〃以下の艦隊を攻撃する」

これは、『IF作戦』参加時から決まっていたことだ。港湾施設と警戒艦隊の残党を完膚なきまでに叩き潰す。側面支援としては絶大だ。

問題は、〃コマツグミ〃の艦隊に空母が含まれているか否か。

——こればかりは半々だね。

深海棲艦は、人類と同じく空母の集中運用を可能とするだけの連携を持っている。だから、トラック環礁の空母を一つの艦隊にまとめ、一個機動部隊として運用すると予想していた。

だが、深海棲艦が〃コマツグミ〃の存在をより重く見ていれば。そちらを守るために、優先的に空母を配備している可能性もある。

とにかくこればかりは、実際に索敵機が艦隊を見つけてみなければわからない。舞としては、一刻も早く、敵艦隊が見つかることを祈るばかりだ。

「・・・ねえ、提督」

「ん？どうかした？」

「さっきつから、紀伊姉さんがものすつごく戦いたそうなんだけど・・・」

「・・・あー」

「雲仙」の後方で、機動部隊の守りに着く超巨大戦艦の様子がありありと浮かんだ。普段戦闘をできる機会が少ないだけに、こうした時は意外と最前線に出たがる。

「・・・まあ、決着は夜間砲撃戦だろうし、出番はあるよ。・・・多分」正直、舞は迷っていた。

できれば、「コマツグミ」とは直に話してみたい。なぜ、乙海域を出たのか。なぜ、トラック沖に来たのか。

「イレギュラー」という存在は、何の理由も考えもなしに動くような深海棲艦ではない。

会って、話がしたい。そんな危険な考えを持っていることに、舞は今更ながら気づかされた。

「・・・迷ってる？」

「うん、まあ、ね」

「それは、「コマツグミ」を沈めてしまうかどうか？」

舞は押し黙る。

話はしてみた。だが、トラック沖で彼女と会談することは危険すぎる。一歩間違えば、自分たちと「イレギュラー」の両方の存在が、第三者に知られてしまう可能性が高い。

「コマツグミ」との決着。それは、彼我どちらかの完全撃破以外にないものだろうか。

「・・・まあ、今悩んでも仕方ないよね」

まずは、やってみなければ。やって、自分に何ができるのかを、見極めなくては。

波濤の先を見遣る。「紅鶴」から、トラック諸島への第一次攻撃隊発艦を知らせる報告が入ったのは、それからすぐのことだった。

◇

「雲仙」では、その高い通信能力を生かして、電波の傍受を行っていた。深海棲艦側のものは解読できないが、日本海軍側のものとはわかる。傍受した内容を、雲仙が暗号を翻訳して、舞に状況を知らせた。

「一機艦（第一機動艦隊）が空襲を受けてるみたい」

「敵機動部隊の位置に関しては、何かわかる？」

「トラックの北西海域にいるみたいだよ。数は正規空母三、軽空母二」

「じゃあ、空母は機動部隊に集中してるんだね」

「そうみたい」

「これで、少し負担が減る。」

「引き続き、傍受をお願い。何かあったら報告して」

「了解」

雲仙と言い交わした舞は、マイクを取って紅鶴を呼び出した。

「紅鶴、第二次攻撃隊の準備は？」

『準備できてます。後は甲板に並べるだけです』

「了解。もう少し、待ってて」

通信を切って、舞は考え込んだ。

——事前偵察で絞り込んだ位置に、「コマツグミ」の艦隊がいな
い……?」

索敵機からは、いまだに「敵艦見ゆ」の報告は来っていない。単純に、何らかの要因で捉えそこなったのかとも思ったが、索敵機からの定時連絡が途絶えることもないし、該当海域の雲量も少なく快晴だ。索敵機側のミスとは思いくかった。

とすれば、どこにいるのか。「コマツグミ」がトラックの南方を行動区域と定めていることは明白で、そこには何らかの理由があるはずだ。だとすれば、それをそう簡単に曲げるとも思えない。

例えば、以前アスチルベが言っていた、深海棲艦の起源に関する探究が目的だったとしよう。目当てとするものが見つからず、他の海域に映ってしまったのだろうか。

その可能性は低い。Z海域に展開する多数の「イレギュラー」たちが、一年以上をかけてようやく「目当てのものはない」と判断できたのだ。たった一隻の「イレギュラー」が、わずか数ヶ月でこの広大

なトラック南方海域を搜索しつくし、「目当てのものはない」と判断できるとは到底思えない。

「コマツグミ」は、まだ近くにいる。舞はそう思っていた。

ある種の勘だ。半年近く『T・T独立艦隊』を率いてきて培われた、提督としての勘。

——確証はないけどね。

自嘲気味に、舞は心の中で笑った。

「索敵機から。そろそろ燃料が危ないから、帰投するって。それと、第一次攻撃隊のトツレを受信。一機艦航空隊の姿はなし」

雲仙が報告する。

「了解。索敵機は、『紅鶴』に集中的に降りるように伝えて」

「わかった」

雲仙が索敵機に指示を出す。舞もマイクを取って、紅鶴に索敵機の集中回収を命じた。

「これで、深海棲艦——『コマツグミ』もこっちの存在に気付いたはず」

だが、舞は自らの表情が険しくなっていることに気付いた。

何だろう。何か、引つかかる。何か、違和感がある。

本場に、『コマツグミ』はこちらに気付いたのか。

なぜ、発見できないのか。

トラックの南方に位置取った意味は？

空母を従えてない理由は？

何かが引つ掛かる。舞の思考を掻き乱す。掴めないその正体に、眉間にしわが刻まれるのがわかった。

答えは唐突に示された。

『電探に感—三時の方向より急速に接近する艦影あり！』

「雲仙」の艦橋に響いた叫びは、紀伊のものだった。

「艦影？」

「提督、こっちの電探も捉えたー！」

雲仙が声を張り上げる。電探に映る影から、その詳細を読み取っていった。

「距離四万。数、十二。戦艦一、巡洋艦五、駆逐艦六。速力二八ノット！」

——強襲……！

舞は背中が寒くなるのを感じた。現在の第零別働艦隊——零別艦は、輪形陣を敷いている。一本槍となつて突つ込んでくる敵艦隊には、このままでは対処できない。唯一すぐに動けるのは、輪形陣最前部から突出している「雲仙」だけだった。

「紅鶴と白鶴の退避を優先！敵艦隊は、一先ず雲仙と龍風、清風で迎え撃つ！」

舞は即断した。これを受け、「雲仙」と輪形陣右翼に位置取る二隻の駆逐艦が大きく舵を取る。残つた艦たちは速力を調整しつつ、まずは輪形陣を解いて二隻の空母を戦場から遠ざけようとした。

「九頭龍、紅鶴と白鶴の直衛をお願い」
『了解』

本当は戦いたくたてしようがないという様子ながらも、九頭龍は了承の意を示す。

『提督、まずは敵駆逐艦を引き剥がせばいいんでしょう？』

転針した「雲仙」の右舷を進む龍風が尋ねる。

「うん。ちよつときついと思うけど、しばらくは二人でお願いね」
『了解！』

言うや否や、二隻の駆逐艦は急激に加速して、迫りくる敵艦隊へと突撃する。その動きを見て取ったのか、電探に映る影のうち、小さなものが六つ、動きだした。

「敵艦隊見ゆ！」

距離三万。「雲仙」の艦橋から、ついに敵艦隊が見えた。舞は双眼鏡を覗き込み、その姿を見る。

水平線の向こう側から、摩天楼を思わせる構造物がせり上がってきた。お互いが高速で接近しているため、その姿はみるみる大きく、はつきりとしてくる。

——間違いない。

敵艦隊の中央、一際巨大な深海棲艦がいる。数隻の駆逐艦と巡洋艦

を従え、白波を蹴飛ばしながら驀進するその姿は、戦国時代の騎馬武者を彷彿とさせた。

丈高い艦橋。幅広の艦体。ハリネズミのような両用砲群。そして何より、前甲板に集中配備されている、特徴的な三基の四連装砲塔。コードネーム“コマツグミ”。舞たちが探していた、“イレギュラー”。

『紅鶴と白鶴の退避完了しました。これより、支援に向かいます』
紀伊が報告する。そして、それから数秒後。

“コマツグミ”が、その砲身を振り立て、巨大な砲炎と共に第一射を放った。

◇

艦艇データファイル10

“コマツグミ”

全長・・・二六〇・〇メートル

全幅・・・三八・五メートル

排水量・・・六万トン（推定）

速力・・・二八ノット

五〇口径一六インチ四連装砲三基

三八口径五インチ連装高角砲十六基

四〇ミリ四連装機銃八基

二〇ミリ単装機銃二十四基

元は乙海域北部に確認された“イレギュラー”であるが、『T・T独立艦隊』の活動低迷期に海域を脱したらしく、トラック沖にて再確認された。“イレギュラー”としては初めて、乙海域外で活動する。主砲を前甲板に集中配置し、重要防御区画を短くする発想は“ネルソン”級や“リシユリユ”級などと共通だが、本艦は後部甲板を対空火器で埋め尽くしており、総合的な防御能力は圧倒的に上である。

砲弾の乱舞

砲弾の暴風雨は、まるでスコールのように唐突に、しかし激しい勢いで降り始める。その只中に放り込まれるのは、危険極まりない。

「コマツグミ」の放った第一射は、轟音を引きずって「雲仙」の頭上から降ってきた。もつとも、お互いに向き合った状態で、相対速度が六〇ノットを超えているのだから、さすがの「イレギュラー」も命中弾は得られなかった。

「両舷一杯！」

機関を最大に唸らせながら、雲仙が叫ぶ。前方への強い加速に、舞は艦橋のへりに掴まることで耐えた。

「このまま突っ切って！接近戦を仕掛ける！」
「了解！」

「コマツグミ」は、非常に特異な艦だ。その主砲は、全てが前方に配置されており、すなわち現状の向かい合った状態では、「雲仙」が圧倒的に不利だった。

ともかく、このハンデを詰められるだけの近距離に入らなければ話にならない。分厚い「コマツグミ」の装甲は、いくら長砲身高初速の三六サンチ砲をもつてしても、二万を切らなければ効果は望めなかった。

———そこまで、何としても辿り着かないと。

砲撃を始めれば、後はどうでもなる。速射能力が異様に高い「雲仙」の三六サンチ砲なら、十二門の一六インチ砲にも十分対抗できるはずだ。

『龍風、敵駆逐艦との交戦に移る！』

『清風、同じく交戦に移りますわ』

「雲仙」の前を行く二隻の駆逐艦から、短い通信が入った。「コマツグミ」の前衛として展開する六隻の駆逐艦。それを同時に相手取ろうというのだ。

「雲仙」に先駆けて、前方海面で砲火が迸る。戦艦に比べればはるかに小さいが、それでも連続的に多数の砲炎が踊る様は、言い知れぬ

迫力がある。最高峰のスペックを誇る二隻の駆逐艦は、その速力と巧みな操艦にモノを言わせて、敵駆逐艦を翻弄していた。

「やるうっ」

雲仙が指を鳴らす。直後、雲仙の右舷至近に、海水の白い柱が出現した。四万トンの艦体が衝撃に煽られ、わずかに振動する。

「・・・もう前後を合わせてくるなんて」

雲仙が「コマツグミ」を睨むようにして言う。相対速力の大きさに惑わされて、「雲仙」を大きく通り越していた「コマツグミ」の砲撃は、すでにその誤差を詰めることができたのだ。

縦が合えば、残るは横だ。高速力で驀進中とはいえ、「雲仙」に命中弾が生じるのは時間の問題と言えた。

「距離は？」

「二五〇（二万五千メートル）！」

——後少し。

一瞬、この段階で発砲してしまうことも考えた。だが、「コマツグミ」と戦うためには、艦を回頭させて「雲仙」に搭載されている全八門の主砲を使えるようにしなければならない。この段階で舵を切れれば、距離を詰めるのが遅くなってしまう。

二万メートルを切らなければ決定的な打撃を与えられない以上、今はただ突き進むしかなかった。

「何発か喰らうかもしれないから！提督も覚悟しといて！」
「了解」

雲仙の勧告に、舞は頷いてへりを掴む手にさらに力を込める。艦橋で衝撃に耐えるには、体の軽い舞はこうするしかなかった。

「コマツグミ」がもう一度発砲する。これが四度目の射撃だ。昼戦なら、そろそろ夾叉や命中が出てもおかしくない頃合いである。

そして、案の定。

「コマツグミ」は、三基の四連装砲塔から、それぞれ二門ずつ、観測射を放っていた。すなわち、飛翔する砲弾の個数は合計で六発。これが、六つの水柱を立てることになるのだ。

だが、今回は違った。生じた水柱は五本。一本足りない。では、残

りの一発はどうなったのか。

その答えは、強烈な衝撃となつて舞に示された。へりに掴まつていても思わずよろめいてしまうほどの激しい揺れが艦橋を襲い、ともすれば足が床から浮きそうになる。

「きや・・・っ」

「提督、大丈夫!?!」

雲仙が慌てて尋ねた。舞はコクリと頷く。驚きはしたが、この程度で怯むような舞ではない。

「被害報告」

「右舷一番高角砲に被弾。一番高角砲は大破、使用不能。戦闘航行に支障なし」

「さすがは『雲仙』ね」

「当然!これぐらいじゃあ、びくともしないって」

そう言つて雲仙は笑つた。舞もつられて笑つてしまう。

とはいえ、状況はかなり厳しい。縮まつたとはいえ、彼我の距離はいまだに二万三千。しかもこれからは、三十秒ごとに斉射が降つてくる。一六インチ砲十二発をまともに受け続ければ、いかに『雲仙』が「巡洋艦という名前の何か」のように堅いと言えども、長くはもたない。

「コマツグミ」は不気味な沈黙を続けている。斉射へと移行するべく、その準備を進めているのだろう。まさに、今しも獲物を仕留めんとする野獣のようだった。

そして、時は来た。

「『コマツグミ』発砲!斉射!」

「・・・来たっ」

それまでに倍する勢いで、『コマツグミ』が砲炎を吐き出す。巨大な炎が上がり、さながら地獄を思わせる。そこから飛び立ったのは、十二発の高初速一六インチ砲弾だ。

現在距離は二万二千。砲弾が届くまでは三十秒程度しかない。

「コマツグミ」が二度目の斉射を放つたとき、先に放たれた第一斉射の十二発が落下して、多数の水柱を噴き上げた。海水の塊に覆われ

る「雲仙」。その内側で、命中弾炸裂の衝撃が走り抜け、火焰が踊った。

「ぐ……っ」

その内の一発は、またしても艦橋の至近に落下した。頑丈で丈高い「雲仙」の艦橋が、まるで巨人の手に弄ばれているかのように激しく揺さぶられる。舞は渾身の力で、艦橋のへりに掴まっていた。

「紀伊、そっちはどう!?!」

零別艦に所属する超弩級戦艦は、焦りの滲む声で返答した。

『すみません、私が「コマツグミ」を捉えるにはまだ時間がかかります!それと、観測機の準備をしていなかったのです、高高度気象観測射撃は使えません!目視で撃つしかありません!』

「了解!まだもちそうだから、慌てず正確にね」

『はい!』

次なる衝撃が襲い掛かってきた。今度は一発。舞の眼前で「雲仙」艦首に巨大な破孔が穿たれ、そこから火柱が噴き上がった。

「艦首に被弾!ダメコン急いで!後少して決戦距離だから!」

雲仙が檣を飛ばす。幸い、艦首が浸水している様子もなく、速力は衰えていない。ゆえに、「雲仙」はついに、決戦距離としてた二万メートルを切る事ができた。

「面舵三五!左舷砲撃戦用意!」

舞が雲仙を振り返り、声の限り叫んだ。

「面舵三五、左舷砲撃戦用意!測敵始め!」

雲仙が復唱する。とはいえ、四万トンの「雲仙」がすぐに舵を切れずもなく、転舵までの間にもう一度、十二発の一六インチ砲弾が降り注ぐ。

圧倒的な瀑布。甲板をバラバラと打つ水滴は、まるでスコールに当たっているかのようなようだ。そして、艦を揺るがす衝撃が、今度は後部から襲ってきた。前につんのめるような動きに、舞は腕を突っ張って耐える。

「帰ったら筋肉痛になりそう」

「揉んであげるから安心して」

雲仙と軽口を言い合っているうちに、艦首が右に振られ始める。これでは相対位置が変わるから、「コマツグミ」も射撃をやり直さなければならなくなるはずだ。もっとも、相対速力と彼我の距離が小さくなった分、確実に少ない射撃で当ててくるだろうが。

こちらが回頭している間、「コマツグミ」の砲撃が止む。束の間の風——否、どちらかと言えば台風の目だろうか。ほんの一時の、静かな時間。

「回頭完了！主砲射撃用意！」

回頭中に左舷へと向けられた三六センチ砲八門が、その砲門が開かれる時を今や遅しと待っていた。

「敵艦再び発砲！」

回頭によつて斜め左舷方向に移った異形の深海棲艦が、その砲口に再び主砲発射の火焰を躍らせたのだ。

「最初から斉射！」

よほど腕に自信があるのだろう。「コマツグミ」は、初弾斉射に踏み切った。

が、それがこの艦娘——雲仙の闘志に火を点けた。

「それは私の十八番だああああああっ！」

叫び声と共に、「雲仙」が第一射を放った。こちらも同じく斉射だ。長砲身三六センチ主砲が八門一斉に咆哮を上げ、散々撃たれてきた敵艦に向けて飛翔していく。お互いの砲弾は上空で交錯し、それぞれの目標へと降り注いだ。

「コマツグミ」の射弾が、「雲仙」の周囲で炸裂して、衝撃で艦体を揺さぶる。だが、命中弾はなかった。砲弾は全てが左舷海面にまともに弾着し、十二本の水柱となった。

今度は「雲仙」の砲撃が落下する番だ。放たれた八発の三六センチ砲弾が、流星群となつて「コマツグミ」に降り注ぐ。

——お願い……！

祈りを込めて、舞はその行先を見守った。

立ち上る水柱。その合間に、

「命中弾確認！二発！」

二本の火柱が上がった。

「見たかつ！」

「連続斉射に移行！畳みかけて！」

「りよーかいつ！」

返事と第二斉射が同時だった。四基の三六サンチ連装砲が一斉に咆哮を上げ、お返しとばかりに八発の砲弾を放つ。

「次発装填完了！第三射、撃ーっ！」

「雲仙」の主砲は、その速射能力を遺憾なく発揮した。わずか十秒で装填を終えると、先の射弾が落下する前に三度目の斉射を放つ。コマツグミは、いまだに次発の装填を終えていなかった。

「遅いつてー！」

第四射が放たれる。砲撃の反動で艦体が揺れ、艦橋の窓を震わせる。

「コマツグミ」も発砲する。再び斉射だ。が、その砲炎が収まらないうちに、「雲仙」の第二射が落下して、命中弾炸裂の閃光と爆風を振りまく。

「第五射、撃ーっ！」

遠慮はない。戦果を確認する間もなく、「雲仙」が再び発砲した。「コマツグミ」は堅牢な深海棲艦だ。格下の三六サンチ砲では、相当数を撃ちこまない限り無力化することはできない。

「雲仙」の第三射が落下する。爆炎が「コマツグミ」の艦上で噴き出し、装甲の薄い部位を容赦なく削り取る。引き千切られた高角砲が吹き飛んで、宙を舞った。

「第六射、撃ーっ！」

本日六度目の発砲だ。第一射からは一分ほどしか経っていない。加熱した砲身に飛沫が触れて、ジュツと音を上げる。

「雲仙」第四射の落下と、「コマツグミ」の第二射弾着がほとんど同時だった。第六射の砲声が収まった。「雲仙」艦上に炸裂音と破砕音が響き、細い高角砲の砲身が弾け飛ぶ。逆に「コマツグミ」艦上にも命中弾が生じ、主砲の正面防盾に弾かれて火花を散らす。甲板に食い込んだ砲弾が、鋭い断片を辺りにまき散らした。

『提督！』

第七射を放つ「雲仙」の艦橋に、紀伊の声が届いた。

『敵艦を捉えました！支援砲撃始めます！』

「ありがとう！早風と綾風は!？」

『龍風たちの支援に向かいました！』

「了解！」

通信を終了し、舞は左舷前方の「コマツグミ」を見遣る。「雲仙」の第七射発砲と同時に、「コマツグミ」もまた、斉射を放っている。

「雲仙、後少し！やれるでしょ!？」

「当然！」

額に汗を浮かべながらも、雲仙が笑う。被弾と損傷は、艀装装着者の艦娘にも痛みとなって感じられるのだ。

「雲仙」の第八斉射が、大気を震わせる。負けるわけにはいかない。そんな覚悟を滲ませた咆哮だった。

加熱した砲身が冷却機構によって冷やされ、開かれた尾栓から砲弾が込められる。ほとんどを自動化されたこれらの作業は、あつという間に終了した。揚弾機が動き、次に砲身に込められるべき三六センチ砲弾を準備する。

「第九射、撃！っ！」

砲撃の反動は、水圧機の駆動によって吸収される。が、全てを吸収することなどできずに、横への揺れが生じた。

次発装填作業が急がれる中、「コマツグミ」の第三射が襲い掛かってきた。

立ち上る水柱。迸る閃光。

それまでで一番大きな衝撃が、「雲仙」艦橋を揺すり、舞を突き飛ばした。

コマツグミ

衝撃に振り回された舞は、艦橋の床に強かに打ち付けられた。咄嗟に着いた手のひらに、床の冷たさが伝わってくる。

「提督?」

天井から伸びる艦装に接続されていたことで倒れずに済んだ雲仙が、舞の安否を尋ねる。若干頭がくらくらするものの、体のどこかに怪我等はなかった。

「な、何とか大丈夫」

体を起こしながら、舞は笑顔を作る。蒼白になりかかっていた雲仙も、わずかに表情を緩め、口の端を吊り上げた。

「被害は?」

服に付いた埃を払い、被ったキャップ帽の位置を直しながら、舞が雲仙に尋ねる。

「艦橋基部に被弾。主砲と統制装置の主回線がやられてる。補助回路接続まで一分頂戴」

「了解。慌てず、急いで、正確に、ね?」

「了解!」

雲仙は威勢よく答えて応急修理の妖精たちに指示を出す。状況はそれほど樂觀できなかつた。

「コマツグミ」が再び斉射を放つ。鋼鉄の嵐のごとき「雲仙」の砲撃が止まった今、「コマツグミ」の斉射を遮るものは何もない。長砲身の一六インチ砲十二門が、巨大な砲炎を上げていた。

「頼むよ紀伊姉さん……!」

応急処置を指示する雲仙が、後方から支援砲撃を行うことになっている紀伊に、祈るように呟く。頼みの綱は、「紀伊」が搭載する五一サンチ砲のみだ。

その想いに応えるかのように、「コマツグミ」の周囲に一際大きな水柱が立ち上った。数は三本。間違いなく、後方の「紀伊」からの砲撃だった。

『こちらで牽制します!早急に復旧を!』

紀伊からの通信も入る。

「ありがと、紀伊姉さん！」

雲仙もそう言つて、より一層応急修理を激励する。「合点承知！」とばかりに、妖精たちが張り切り、回路の復旧を進めていった。

その間にも、敵弾が落下する。衝撃が艦体を走り抜け、金属のひしやげる音が聞こえた。

「被弾二！カタパルトが吹っ飛んだよ！」

「どうせ弾着観測はできないから問題ない！」

「だよね！」

そして、回路復旧完了の報告が、妖精たちから入った。すぐさま、雲仙は再度の斉射を命令する。

「撃ーっ！」

八門の三六センチ砲が、待つてましたとばかりに咆哮を上げた。高初速の砲弾が空を切り裂き、「コマツグミ」へと迫る。

もちろん、それで終わりではない。十秒の装填時間の後、もう一度斉射が放たれた。今度も八発。入れ替わりに、「コマツグミ」の一六インチ砲弾も降り注ぎ、「雲仙」の艦体を抉り取った。

「四番砲塔がやられた！射撃不能！」

後部に被弾した一発が、四番砲塔のバーベツトを捻じ曲げ、旋回不能に陥れる。舞は弾火薬庫に注水するよう、雲仙に指示した。もう撃てない以上、下手に誘爆したりしないようにという処置だ。

「紀伊」の砲弾も敵艦の周囲に落着する。こちらはまだ弾着修正中らしく、三本の水柱が上がっただけだ。それでも、その三本は「コマツグミ」を的確に挟み込んでいた。

雲仙も負けてはいない。もう一度斉射。六門に減ったとはいえ、単位時間当たりの弾薬投射量では、まだ「コマツグミ」に対して優位を保てるはずだ。

『提督、全力斉射に入ります』

紀伊が覚悟を滲ませて言う。「紀伊」が全力斉射を放つ。それはつまり、「コマツグミ」の撃沈も辞さないということだ。あらゆるものを木っ端微塵に打ち砕く「紀伊」の砲撃は、それだけ細心の注意を

払わなければ、すぐに『イレギュラー』を海の藻屑に変えてしまう。紀伊は何よりもまず、舞と雲仙を守ることを優先したのだ。

『雲仙』の三六センチ砲弾が弾着する。『コマツグミ』の装甲は抜けなくとも、その表面で弾け、装甲の薄い部分を削る。度重なる被弾で、両用砲群は更地となり、濃い黒煙を燻らせていた。

その煙を吹き飛ばすほどの勢いで、海水が天高く持ち上げられた。『紀伊』の第一斉射が落着いたのだ。

艦中央部に閃光が走り、要塞のような『コマツグミ』の四連装砲塔を易々とひしゃげさせる。

敵艦艇群の動きも収束へと向かいつつある。龍風と清風に加えて、栗駒と霜風、綾風が突入し、その動きを抑えることに成功していた。

勝負はあつた。そう言えた。

それを悟ったかのように、『コマツグミ』は砲撃を止めた。それを見た舞もまた、撃ち方待てを指示する。

途端、信じられないことが起こった。

「っ?!敵艦から通信?」

素っ頓狂な声を上げたのは雲仙だ。舞も、驚きの余り咳き込みそうになる。

「ど、どういうこと?」

「ええっと、国際海軍の共通バンドで呼びかけてきてるんだけど」

——マズイ!

舞の背中を冷たい汗が伝う。そう遠くない海域には、日本海軍の機動部隊があるのだ。国際海軍の共通バンドなどで話されては困る。今、『イレギュラー』の存在を、そして『T・T独立艦隊』の存在を、知られるわけにはいかない。

「すぐに、別バンドに切り替えるように言つて!」

「了解」

雲仙が、『コマツグミ』側にそう伝える。以外にも、相手はあっさり了承の意を示して、こちらの指定したバンドに合わせてきた。そこで初めて、舞は回線を開く。

『すつげえええつ！』

回線が開かれた瞬間、マイクからそんな声が飛び込んできた。舞は、一瞬何が何だかわからず、盛大にハテナマークを浮かべる。

「えつと、貴女は？」

辛うじて、それだけ訊くことができた。

『？私は私だよ？』

そうだった。舞は、我ながら間抜けな質問をしたことに、苦笑する。『ちなみに、お前たちは私を何と呼んでいるんだ？』

そんなことまで訊いてきた。少し迷った後、舞はこう答える。

「コマツグミ」。貴女のこと、そう呼んでます」

『へー、よくわかんないけど、いい名前っぽいから採用！じゃあ、以後私はコマツグミってことで』

そう言った後で、コマツグミはコホンと一回咳払いをした。

『えーつと。コマツグミ、貴艦への乗艦許可を求めます』

停船した「雲仙」に、一隻の内火艇が接近してくる。全体的なデザインは、人類製のそれとほとんど同じだ。ただ、その艇首には、鮮やかな紋章が描かれている。

なかなか豪快な動きで、内火艇は「雲仙」の舷側に着けた。流されないようにロープで繋ぎ止めると、コマツグミは降ろされたラツタルに飛び乗って、甲板の舞と雲仙を見上げた。

白く透き通るような肌が、海面に反射した光で蒼く染まっている。一房銀の混じった黒髪は肩口で短く切り揃えられ、風の中で軽やかに揺らめく。黒いワンピースが、その容姿によく似合っていた。

コマツグミは、ラツタルを元気に上がってくる。最後の二段を一足で上がると、笑顔で気を付けの姿勢を取った。

「日本海軍、磯崎舞特務大尉です」

「雲仙です」

二人はそう言ってコマツグミを迎える。

「私がコマツグミ。乗艦許可、感謝します」

コマツグミは碎けた敬礼で答える。その表情は、さつきまでお互い

が敵同士だったとは思えない。実に愉快そうな雰囲気、彼女は二人の方に歩み寄ってきた。

「驚きました。貴女方から接触してくることは、初めてでしたので」

「あー、うん、まあね。皆そういうの苦手だしね」

舞は、艦上に即席で設けた茶席に、コマツグミを案内する。その内の一つを掴んで引き、コマツグミは軽やかに席に着いた。

「ほー、こういうのなんかいいねえ」

「気に入ってもらえたなら、何よりです」

被っていた帽子を脱いで、机の上に置く。沸かしておいたお湯で、雲仙が紅茶を淹れた。

全員が席に着いて、取り敢えず一口、カップに口を付ける。暖かな薫りが辺りに漂い、束の間の休息を戦場にもたらす。やはり、話を始める前には、お茶が一番だ。

「おいしい」

早速飲み干したコマツグミが、おかわりを求めた。

雲仙が新しくお湯を沸かしている間に、舞が話し始める。

「まずは、貴女のことを訊いてもいい?」

「?私のこと? いいよいいよ、何でも訊いて」

コマツグミは変わらぬ笑顔で体を出した。

「まず、どうして貴女は、私たちに接触してきたの?」

「ええっと、それなんだけどね?」

コマツグミは、チラリと残存の駆逐艦の方を見遣った。それからグッと舞の方に顔を寄せ、声を潜める。

「旗艦に会っても、内緒にしてね?」

コマツグミはそう前置いた。

彼女の言う「旗艦」という言葉に、舞は思い至った。乙海域に展開する「イレギュラー」を取りまとめる存在。あらゆる「イレギュラー」の中でも最大の大きさを誇る艦。おそらく、その「イレギュラー」のことだ。

念を押す彼女に、舞も頷く。コマツグミは再び口を開いた。

「私の目的——私が乙海域を離れたのは、そもそも旗艦に命令され

たからなの」

「・・・え？」

一体、どういうことだろうか。

「旗艦から、あなたたちに接触するように、って。トラック沖に出てくれば、必ずあなたたちの方から接触してくるから、って」

舞は黙って、コマツグミの話に耳を傾けていた。

「元々私、あの狭い海域から出たくてさ。他の皆からは変わってるってよく言われたけど。だからまあ、旗艦からの命令にはすぐに従った。で、ここまで出てきて、あなたたちが接触してくるのを待ってたってわけ」

そこまで言って、コマツグミは元の通りに座る。丁度、雲仙が紅茶のおかわりを持ってきたところだった。

「それじゃあ、どうして私たちを襲ってきたの？」

「うん、そこが旗艦には内緒にしておいて欲しいところだね？トラック沖に出てきたのはいいんだけど、半年間、待てど暮らせど誰も来ないから、飽きてきちゃって」

戦闘したくなってしまうらしい。そういえば、どこかにも似たような娘がいたなど、舞は「雲仙」のすぐそばで浮かぶ超弩級戦艦に目を向けた。

「まあ、それはいいや。話が脱線しちゃったね」

俗っぽい言い方で、コマツグミが話の方向を修正する。一回の咳払いをした後、彼女は改めて、舞に話の続きを促してきた。

「半年間、何もしてなかったわけじゃないでしょう？」

「直球で訊いてくるねえ」

コマツグミは、またおどけた様子で笑った。

「確かに、何もしてなかったわけじゃないよ。せつかくZ海域を出たんだから、私たち「異端者」が探しているものを、トラック周辺でも搜索してみることにしたの」

「でも、見つからなかった」

確認するように、舞はコマツグミに尋ねる。

これまでの調査で、舞たちは「イレギュラー」が探している『深海

棲艦の根源に迫るもの』は、太平洋側での深海棲艦の本拠地であるハワイ近海にあると睨んでいた。

ところが、舞の予想に反して、コマツグミの反応は何とも微妙なものだった。

「うーん、なんていうか。確かに、何も見つからなかったよ？でも、何もなかったわけじゃない」

「・・・え？」

「私が——あなたたちも含めた私たちが探しているものは、間違いなくトラック諸島周辺海域に存在する」

舞は、我が耳を疑った。

深くなる謎

衝撃の事実を口にしたにもかかわらず、コマツグミはこれまたゆつくりと、心底美味しそうに紅茶を楽しんでいる。意図的に唇を湿らそうとした舞とは大違いだ。

席に着いている三人——舞、雲仙、そしてコマツグミが、それぞれのカップを置いたところで、話は再開された。

「どういう意味？」

「と、いうと？」

——調子狂うなあ。

内心で苦笑しながら、舞は質問をやり直す。

「トラック沖に、私たちの探しているものがある。そう思ったのは、どういうこと？」

「ああ、そういうこと」

人間の言葉って難しいねえ。そんなボヤキを滲ませて、コマツグミはしばし考え込んでいた。ゆつくりと、慎重に言葉を精査しているようだ。

「・・・はつきり言っちゃえば、上手く説明できないってところかな」
根拠が何も無い、というわけではないらしい。ただその根拠というのが、上手く説明することができないというだけのことらしい。

「それでもいいよ。話してくれる？」

今必要なのは、断片でもいい、舞たちが迫ろうとしているものの情報だった。「イレギュラー」を産み、雲仙たちを産み、もしかしたら艦娘や深海棲艦を産んだかもしれない「何か」に繋がる、情報だ。

「・・・わかった。じゃあ、話すね」

コマツグミが語りだした。

「トラック沖で行動するようになってからね、何て言うかこう・・・テレパシーって言えばいいのかな。頭の中に、何か靄がかかるみたいに、言葉が聞こえてくるんだ。はつきりとした声じゃないし、意味なんてわからないけど。何かを呼びかけるみたいに、響いてる」

「今もっ？」

「かなり弱いけどね」

チラリと窺った雲仙は、首を横に振っている。彼女は、特に何も感じていないらしい。とするならば、深海棲艦に特有なものなのだろうか？

「言葉の強弱は、トラック環礁からの距離で変わってた。離れば弱くなるし、近づけば強くなる。一度、環礁ギリギリまで行った時は、頭が割れるかってくらい強かった」

でもね。コマツグミは、機関を止めて彼女の艦に寄り添っている駆逐艦を見た。

「あの子たちには、何も聞こえないみたい」

深海棲艦だから聞こえた、そういうわけではないみたいだ。むしろどちらかと言えば、「イレギュラー」だから聞こえた、その可能性が高いだろうか。

「あの声は何なのかな、って考えた時に。思いつくことなんて一つでしょ。私は、『異端者』なんだから」

「そっか……。そうだよ」

「そうそう、そうだよ。私っていう『異端者』にしか聞こえないんだもん。私たちの探している『何か』じゃないかって考えるのが、自然でしょ」

確かに、自然だ。その通りだと、舞も思う。

「私が、私たちの探している『何か』がトラックにあるんじゃないかって思ったのは、そういう理由」

「一理、あるね」

雲仙も納得したように頷いた。

「それで、それを確認することはできたの？」

「いいや、全く。トラックを守ってる子たちは、融通が利かなくて、『命令されてるからダメだ』って、入れてくれなかったんだよ」

殊更残念そうに、コマツグミは溜め息を吐いた。それもそうだし、せっかく、探し求めていたものかもしれないものが、そこにあるというのに。確認することができないなんて。

「命令っていうのは、鬼姫——『統制者』からの命令ってことでい

いのかな」

「まあ、多分そうなるんだろうねえ。あの子たちがあそこまでに頑なになるような命令っていったら、それぐらいしか考えられないし。つまり『統制者』も、あそこに何かがあるのは知ってるんだろうね。ただ、それを見つけさせたくない理由があるんだと思う」

——よつぽどのものがありそうね。

俄然、コマツグミの考えが現実味を帯びてきた。

さらに質問を重ねようと、舞が口を開きかけた。その時、三人が腰掛ける机に、慌てた様子で妖精が駆け寄ってきた。それに気づいた雲仙が、舞に少し待ってほしい旨を目で伝える。

妖精は、身振り手振りを交えて雲仙に何らかを伝えていた。雲仙の表情が、みるみる険しくなる。

——何か、あつたのかな？

舞は自然と意識を引き締めた。

「ありがとう。引き続き、警戒をよろしく」

雲仙の言葉に頷いて、妖精は再び慌ただしく戻っていった。

「何だって？」

顔を上げた雲仙に、舞は尋ねる。

「電探に機影。単機だつて。多分、偵察機」

「っ!!」

背中に冷たいものが伝う感覚がした。

「方位は？」

「一七五。ほとんど真南」

「深海棲艦・・・じゃ、なさそうだね」

舞たちの南方に深海棲艦艦隊が存在しないことは確認済みだ。そんなところに位置取る意味もない。だとするならば・・・。

「アメリカ海軍、それともオーストラリア・・・？」

否、と。舞は後者の可能性を否定した。確かに、オーストラリアには海軍があるが、彼らにはBOBがない。深海棲艦との積極的な戦闘を避けることを、彼らは決めていた。偵察機を放ってくる道理がない。必然的に、偵察機の送り主はアメリカ海軍ということになる。

「とにかく、急いで離脱しないと見つかるかも」

雲仙が言った。今一番避けるべきことは、『T・T独立艦隊』と『コマツグミ』が発見されることだ。

舞はコマツグミを見る。彼女は、先ほどまでと変わらない、どこか愛らしささえ感じる表情でこちらを窺っていた。

残念だ。もっと、話したいことがあった。彼女は違う。ただの『イレギュラー』ではない。

おそらくは、今最も、艦娘と深海棲艦の謎に近い存在だ。

「もう少し、ゆつくりできるとよかったんだけど」

コマツグミの方も、残念そうに呟いてカップに残っていた紅茶を飲み干した。それから、おもむろに立ち上がる。

「お互いに、まずは目の前の厄介ごとから逃げなくちゃいけないみたいだね」

「そう、みたいね」

舞も立ち上がる。手を差し出すと、コマツグミもまた自然な様子でその手を握り返してきた。

「色々話を聞かせてもらって、ありがとう」

「こっちこそ、美味しいお茶をありがとね」

しっかりと握られた手が、やがて離れる。コマツグミの笑みが益々大きくなった。

「貴女はこれからどうするつもりなのか、聞いてもいい？トラック沖に留まるつもりはないでしょう？」

「あー、うん。まあね」

コマツグミはしばらく考えた後、この海域を離れてハワイに行くと言った。

「ちよつと融通の利かない『統制者』に文句言ってくるよ」

そんな軽口を叩いて、悪戯っぽく笑った。

「ていうか、あなたたちは私を沈めないの？」

コマツグミは不思議そうに舞を見る。確かに、舞には彼女を沈める気はなかった。

「沈めないよ。確かに、乙海域外に貴女を放置することは危険だけど、

今は沈めてる余裕はないしね。それに、私が探しているものに近づくためには、貴女の協力が必要だし」

それから、コマツグミと同じように、悪戯っぽい笑みを浮かべてみた。

「お互い、このままじゃ消化不良でしょ」

「あはは、それもそうだねえ」

最後には二人とも、無邪気に笑っていた。少し歪んだ再会を誓う笑顔。次に会う時はどちらかが死ぬ時かもしれないのに、二人の少女はこれ以上ないほど清々しい表情をしていた。

「次会った時には、ちゃんと決着を着けようか」

『敵偵察機接近。視認可能距離まで三十分』

雲仙が精神同調を終えるとともに、紀伊から緊迫した報告が入った。

「すぐにここを離脱するよ」

舞はすぐに主機の始動を指示する。各艦の艦尾付近がにわかには立ち始め、艦に前進する力を与えた。

最も排水量のある「紀伊」が一番動きだすのに時間がかかる。彼女が動くのを確認して、舞たちは索敵機の探知範囲から逃れる方向へと舵を切った。

「コマツグミ」も動きだしたよ」

雲仙が報せた。「紀伊」の五センチ砲弾をまともに喰らった第一砲塔は大きくひしゃげて黒煙を噴いているが、航行に支障はないようだ。さすがは「イレギュラー」といったところか。

——また、会おうね。

次に会う時は、舞もまた、より多くのことを知っているはずだ。彼女と共に、今のこの世界に存在する謎を——艦娘と深海棲艦という存在の意味を、探っていくことだろう。

二つの艦隊は、急速に離れていく。お互いの艦影が、水平線の向こうへ見えなくなるのに、さして時間はかからなかった。

◇

トラック沖の戦いから、一夜が明けた。舞たちは、ニューギニアの沖三百海里の位置を西へ、すなわちタウイタウイのある方向へと進んでいた。

トラック環礁をめぐる一連の戦闘は、すべて終結していた。トラック泊地を防衛していた艦隊と激闘を繰り広げた日本海軍の機動部隊は、トラック攻略の拠点になっているパラオへと帰投を始めたらしい。

結局、昨日現れた偵察機の正体も、目的もわからずじまいだった。電波の目を凝らして、その接近を見張っていたのに、偵察機が再び現れることはなかった。なぜあの時、偵察機が現れたのか、舞は計りかねていた。

「あれは、何だったのかな」

平和な色を湛える海を見つめて、舞はポツリと呟いた。オートナビゲーションへ切り替えている雲仙が、その横で彼女の呟きを聞いていた。

「コマツグミの通信を聞いて、偵察機を出してきた……ってわけじゃないさそうだよね」

「そうだね。トラック環礁の少し手前で反転したってことは、あそこが索敵範囲ギリギリだったはず。それだったら、コマツグミが共通バンドで通信を試みた時刻と偵察機の予想発艦時刻が合わないから」

偵察機の数から見て、おそらく艦上機だ。あの海域の近くに、空母がいたことになる。

「そもそも、何であんな所にいたのかな？」

「対豪航路の護衛、ぐらいしか考えられないけど。あんな位置にいるとは思えないし、トラックの方まで偵察機を飛ばす必要もないはずなのに」

——何だか、嫌な予感がする。

そう感じていた提督としての舞の直感は、間違いではなかった。

緊急事態を告げるブザーが、艦橋に鳴り響いた。二人はあらゆる思考を頭の隅に押しやり、身構える。艦装に駆け寄った雲仙が、すぐに精神同調に入った。

「っ！電探に感！機影位置を確認！」

「また偵察機?！」

間違いない。昨日と同じ空母の所属機だ。舞の背中を冷たいものが伝う。

「接触を回避する！艦隊、最大戦速、現海域を離脱して！」

「待つて提督！」

舞の指示を、雲仙が遮った。

「新たな機影あり。一つ・・・いや、二つ！間隔狭い！」

———そういうことか・・・！

舞は奥歯を噛みしめた。昨日とは違う。偵察機が、こんなに狭い感覚で飛ぶことなどない。どこかにいる空母は、間違いなく舞たちを捉えるために、偵察機を放ったのだ。

さながら、獲物を仕留めんとする潜水艦の如く。舞には電探に映る偵察機が、必殺の間合いで放たれた魚雷のように思えた。

「どう回避しても、見つかる・・・！」

雲仙も呻く。

———どうしたらいい・・・？

舞は必死に頭を回転させる。何か、この状況を覆せるような手はないか。しかし、考えれば考えるほど、いい手は浮かんでこなかった。

「偵察機との接触まで三十分！」

『提督』

スピーカーから、声が聞こえた。トラック環礁の敵施設を完膚なきまでに叩いた、紅鶴だ。

『“紫電”改は、いつでも出せます』

———偵察機の撃墜、か。

確かに、選択肢の一つだ。電探で早期に偵察機を発見できるなら、こちらが見つからないために偵察機を撃墜するのは、機動部隊戦で有効な手の一つと言える。

が、今回はそうはいかない。

“紫電”改には、日本海軍所属であることを示す日の丸が描かれている。これでは、撃墜した時にこちらの所属を知られ、外交問題に発

展しかねない。

「……撃墜はしない」

『……わかりました』

紅鶴はすぐに引き下がった。

打てる手は何もなかった。否、打つならば昨日のうちに打つべきであった。今となつては、偵察機を回避する方法は何もない。

艦隊全体が重苦しい沈黙に包まれる。永遠とも思えた三十分。 ”雲仙” の見張り員が、薄い雲の合間に人工的な光を見つけた。

「偵察機見ゆ！」

覚悟を決めたような表情が、雲仙の顔に浮かんでいた。

『T・T独立艦隊』の上空に、野太い発動機の音が迫る。ペラが風を切る音が、静かな海面に反響していた。

舞は、現れた機体を双眼鏡で確認する。

太い機体。頑丈そうな翼。濃紺で塗られた機体には、はっきりと星のマークが描かれていた。

艦上爆撃機 “ドーントレス”。米海軍の空母艦載機で間違いなかった。

舞たちを見つけたららしい機体は、しばらく上空を旋回していた。写真でも撮っていたのだらうか、やがて翼を翻すと、元来た方向へと帰っていった。

深海の覇者

トラック沖の戦闘から帰還して、早くも一か月半が経過しようとしていた。その間のタウイタウイは、驚くほどに静かだった。

「雲仙」は、損傷を回復して、すでに出発していた。艦隊はそれまで通りに、タウイタウイ周辺の警戒と、民間航路へ侵入を図る潜水艦の掃討を行っている。舞の前に積まれる書類も、いつも通りだ。文句を言いつつ、紀伊に励まされながら、今日の分は終わらせていた。

舞が書類を終えた頃合いで、タウイタウイに通信が入った。最大級の秘匿がされた回線の相手は、横須賀鎮守府の秘書艦、吹雪だ。艦体を失い、艦娘ではなくなった彼女だが、未だに横須賀——ひいては、横須賀鎮守府提督長の秋山真好中将の右腕として、あらゆる雑務を担当している。

タウイタウイとの連絡は、基本的に吹雪か、イムヤが行っていた。通信室に入った舞は、中で控えていた通信員を退室させ、秘書艦の紀伊だけを横に控えさせる。それからスピーカーをオンにして、回線を開いた。

「お待ちせしました、磯崎特務大尉です」

『お久しぶりです、吹雪です』

感度のいい通信機が、朗らかで物腰の柔らかい、女性の声を拾う。舞が吹雪と直接会ったのは、深海棲艦の襲撃によって遭難したところを「雲仙」に救助され、タウイタウイ泊地の提督に成り行きで就任した直後だった。「伊一六八」に乗って、吹雪はタウイタウイにやって来た。彼女の依頼で、舞は正式にタウイタウイの提督となったのだ。

艦娘でなかった三年の間成長したという吹雪は、舞よりも二、三歳上の年齢に見える。明晰な頭脳を持つ、非常に優秀な秘書艦だが、時に屈託のない笑顔を見せる。殊に、秋山との思い出について話すときは、こちらが見惚れるほどの笑みを見せた。

その時と同じ、優しいな吹雪の声に、舞は若干の緊張感を持ちながら口を開いた。

「先日の『IF作戦』の不手際、すみませんでした」

『IF作戦』——トラック環礁攻略戦に支援部隊として参加した舞たちは、その帰途で米艦載機からの接触を受けてしまった。あれは、完全に舞の油断だった。

『いえ、気にしないでください』

眉を八の字に下げているのがありありとわかる声の調子で、吹雪が言った。

『報告は読みました。その後の調べでは、米国の第七方面艦隊所属空母“エンタープライズ”の艦載機であつたらしいことがわかっています』

それから、少しの間があつた。

『実は・・・今回の作戦を立案したのは、私なんです』

『吹雪さんが？』

『はい。元々、発見されることも覚悟の上の作戦でした。黙っていて、ごめんなさい』

『それは・・・』

とつきに言葉が出てこなかつた。

『T・T独立艦隊』は、“本来は存在しない”はずの軍艦で構成されている。深海棲艦とBOBの出現により、ギリギリのバランスにある現在の世界に、明らかに異質な『T・T独立艦隊』の存在を公表するのは危険なはずだ。それなのに吹雪は、発見されることも覚悟の上で、今回の作戦を立案したというのか。

『米海軍に発見されたのは意外でしたけど。まだ、想定範囲内です』
吹雪の言う“想定”が一体なんのことなのか、舞には掴めなかつた。

こほん。啞然とする舞の意識を戻そうとするかのように、吹雪は話題を切り替える咳払いをした。

『それで、ですね。今回通信した用件を、手短にお話しします』

それまで以上に改まった口調だった。自然に、舞も紀伊も背筋が伸びる。

『今回の接触を起点にして、これから多くの変化が、舞さんたちに起こ

ると思います。どうか、そのことは覚悟しててください」

ゴクリ。額を伝う冷や汗を感じながら、舞は吹雪の言葉を聞いていた。

『いつでも、多くを知っているのは舞さんたちです。最も今の世界の真実に近いのは、舞さんたちです。情報を持つているのは舞さんたちです。そのことを忘れず、冷静に対処してください。何か困ったことがあったら、いつでも私や紀伊さんたちを頼ってください』

どうか、よろしく願います。吹雪の話は、そこで終わった。

◇
吹雪の言った変化は、程なく訪れることとなった。

その日、舞たちはいつも通りの業務を行っていた。舞は山と積み重ねた書類と格闘を演じ、紀伊がそれを横で補佐する。『九頭龍』に率いられた対潜哨戒部隊が潜水艦狩りを行い、定期で入港する輸送船団に備えていた。

「・・・疲れたあ」

執務室で書類を片付けていた舞は、いつこうに減る気配のない紙の山に、うんざりと溜め息を吐いた。それもそのはず、タウイタウイにいる提督は舞だけであり、必然的にあらゆる書類は舞が捌かなければならない。紀伊が手伝ってくれるとはいえ、提督である舞にしか確認できないものもあり、特に輸送船の入港前後はゴキブリの如く書類が増殖して舞を苦しめるのである。誰かゴキジェット持ってきて。

「・・・書類はゴキブリじゃありませんよ?」

紀伊が半目で舞を見ている。心の声が駄々漏れだったらしい。

「そっちはどう?」

「あらかた終わりました。よかったら、もう少しお引き受けしますよ?」

「んー」

紀伊の申し出に、舞はチラリと書類の山を見る。いつこうに減る気配がないとはいえ、目測で三十分もすれば終わるだろうか。

「いいよ、これくらいは自分でやらなきゃ」

「そう、ですか?」

「うん。書類全部をやるのは無理でも、せめて私の分くらいは目を通しておきたいから」

紆余曲折を経たとはいえ、今は舞がタウイタウイの提督だ。皆を守り、導くのが、自らの責任だと思っている。紀伊たちが、舞にとつては唯一の家族のようなものだから。

「・・・わかりました。それでは、お茶を淹れてきますね」

「うん、よろしくー」

微笑んだ紀伊が、袴の裾を揺らして扉の方へ向かい始めた時。カッカッと誰かが走ってくる足音が迫り、扉が慌ただしくノックされた。突然のできごとに、舞も紀伊も瞬時に身構えた。

「どうぞ」

「失礼しますー！」

執務室に飛び込むようにして入ってきたのは、タウイタウイ泊地の通信室を預かる女性兵だ。よほど急いで来たのだろう、長めの前髪が、汗で額にへばり着いていた。息を切らせながら、彼女が報告する。「三瀬から緊急信がありました。泊地に艦影が接近中。深海棲艦と思われるとのことです」

ガタツ

執務中に脱いでいた軍帽を鷲掴みにして、舞は立ち上がる。紀伊と顔を見合わせるだけで、作戦室に向かうことを伝えた。だが、そんな二人を押し留めるように、通信兵の報告が続く。

「その深海棲艦と思しき相手から、泊地宛てに電文が届きました」
「っ!？」

あまりの衝撃に、舞は言葉を失った。

舞たちの目的は、言ってしまうえば深海棲艦と——「イレギュラー」と接触することにある。だが、いままであちら側からアプローチしてきたことはなかった。「コマツグミ」の件にしても、最終的にはこちらから接触しに行ったのだ。

——一体、どういうこと・・・？

ただ一つ、確かなことがあるとしたらそれは、これが吹雪の言っていた「変化」であるということだ。

「電文の内容は？」

「は、はい。『我、戦闘の意思なし。貴艦隊との会合を求める』。これを繰り返しています」

どうしますか。目線にその意味を込めて、紀伊が舞を見ていた。しばらく考えた舞は、右手に握っていた軍帽を被り、その位置を定める。

決心は着いた。

「泊地全体に、警戒態勢を厳に敷くように伝えて。清風と霜風には、輸送船団の入港を待つよう指示」

「・・・それでは」

確認するように呟いた紀伊に、舞はゆっくりと頷く。

「あちらの要求通り、会合を行おう。紀伊は、応接室の準備もお願い」
舞は全てを決めた。紀伊は了承の意を示して頷き、通信兵と共に執務室を後にする。

やがて、泊地全体に警戒警報が発令された。その放送を聞き届け、舞は埠頭へと向かう。そこにはおそらく、「彼女」が待っているはずだ。

「舞さん」

案の定、埠頭に辿り着いた舞を、呼ぶ声があった。白と紅の巫女服を揺らして、軽巡洋艦「三瀬」の艦橋横の見張り所から千尋が覗いていた。その表情は、不安げに眉尻を下げている。

「千尋！」

舞は千尋に向かって大きく手を振る。それに応えた千尋は、それからふわりと艦橋のへりを乗り越え、埠頭に降り立つ。まるで神に加護されているかのような、不思議な現象だ。

「入港を、許可されたのですか」

「うん。ここまで来たってことは、こっちを取って食べる気はないってことですよ」

「それならば・・・大丈夫、ですよね」

「多分ねえ」

こればかりは、確信を持って言うことはできない。けれども舞は、深海棲艦が騙し討ちなどという非合理的な手段を取るとは思えな

かった。この泊地を直接攻撃するつもりなら、そんなことせずとも、真正面から挑んでくればいい。それだけの力は、乙海域の深海棲艦にあるはずだ。

「それで、千尋。お願いがあるんだけど」

「はい」

「今の位置で、『靈感』を使って艦型識別はできる?」

『靈感』。村雨千尋という少女だけが持つ、特別な力だ。原理などは全くもって不明だが、千尋によれば「あらゆる艦船や航空機に宿る魂の波動を読み取るもの」だそうで、この能力を利用して、タウイタウイに接近する艦船や航空機の警戒をしている。

この『靈感』には、二つの種類がある。広範囲索敵型と、高精度指向型だ。前者は全方位あらゆる方向において魂を観測するもので、早期警戒向き。後者は魂を観測できる範囲が狭くなる代わりに、精度が非常に高く、飛翔する砲弾まで捉えることができる。

高精度指向型なら、視認せずとも艦型を識別することが、千尋にはできた。

「可能です。すぐにやりますね」

そう答えた千尋が、胸の前で両手を合わせ、目を閉じて精神を集中する。風が吹いたわけでもないのに、千尋の髪や巫女服が浮かび上がる。十数秒の後、千尋は目を開いた。

「・・・モビー・ディック」です」

そのコードネームで呼ばれる深海棲艦——『イレギュラー』の艦型識別表のページが、舞の頭の中でめくられる。

「・・・まさか、自ら乗り込んでくるなんて」

コマツグミが「旗艦」と呼んでいた、乙海域の『イレギュラー』の中で最大の巨躯を誇る戦艦。その艦影が、水平線の向こうから迫った来る気配が、ピリピリと舞の皮膚を震わせていた。

◇

艦艇データファイル1

『モビー・ディック』

全長・・・三二六メートル

全幅・・・四二メートル

排水量・・・一〇万一二〇〇トン（推定）

速力・・・二八ノット

五〇口径一八インチ三連装砲四基

三八口径五インチ連装両用砲十八基

四〇ミリ機銃多数

二〇ミリ機銃多数

“モビー・ディック”の名の通り、“イレギュラー”の中でも最大の巨躯を誇る。その艦体は白鯨を思わせる純白。艦体に大幅な余裕があるため、搭載する兵装も施された装甲も、他の艦とは比べ物にならない。この艦の撃破には、タウイタウイ最強の“紀伊”をもってしても、苦戦が予想される。操縦者であるミヤコワスレは、乙海域、深海棲艦と艦娘、そして“大いなる先駆者”へと続く謎の鍵を握っているらしいが、詳細は不明。

閉海の姫君

二隻の異形の軍艦が、タウイタウイ泊地に入港しようとしていた。

“モビー・ディック”の艦首で微速前進に伴って上がる波は小さく、まるでさざ波のようだ。だがその実、圧倒的な排水量を誇る艦体の周囲に生じる水流は強大で、下手に小型船が近づけば、飲み込まれてしまう可能性が高い。

スクリューにわずかな逆進をかけたのだろう。“モビー・ディック”が速力を緩め、やがて完全に停止する。その艦首から、巨大な錨が突き降ろされて、海面に飛沫を飛ばした。

“モビー・ディック”に付き従うようにして、もう一隻の深海棲艦も投錨する。“モビー・ディック”と比べると、象と犬ほどの大きさの差があるが、実際には一万トンクラスの巡洋艦だ。六基も搭載された三連装砲塔が印象的だった。

そんな二隻の様子を、舞と紀伊、そして千尋の三人は見つめていた。三人が三人とも、緊張の面持ちだ。それもそのはず、まさかこんな形で、“イレギュラー”側から接触があるとは思いもしなかった。

一体、彼女たちの目的は何なのだろうか。

二隻の“イレギュラー”から、ゆつくりと内火艇が降ろされた。舷側にかかるラツタルを人影が降りていき、内火艇に乗り移る。小さな艇の艇首が波を立て、こちらへと向かってきた。

それぞれの内火艇の艇首に、人影が見える。おそらくは“イレギュラー”を動かす少女たちだ。

一人——“モビー・ディック”から降りてきた少女は、その艦体と同じく純白のドレスをまとっている。頭には、大きな花の髪飾りが添えられていた。

もう一人の少女もまた、白い服装だ。遠目には巫女服に見える。デザインは千尋のものに似ているだろうか。袴だけが深い青だった。

埠頭に近づき、内火艇は速度を落とした。二人の来客の動きを、舞も千尋も注視していた。

先に降りるのは、千尋似の少女だ。埠頭に降り立った彼女が、“モ

ビー・ディック」の少女の手を取り、内火艇から降りるのを手伝う。「いらつしやいましたね」

いつの間にやら隣に立っていた紀伊が、堅さの見える声で言った。舞も頷くだけに留める。そうこうしているうちに、二人の少女が、舞たちの前に立った。

三人は直立不動の姿勢となり、深海からの使者に対して敬礼する。少女たちの方も、随分と堂に入ったお辞儀で、それに応えた。

「タウイタウイ泊地提督、磯崎舞特務大尉です」

代表して名乗った舞に、ドレスの少女が答える。その表情は、こちらが訝しむほどに穏やかで、柔らかい。

「お噂はかねがね。こうして直接お会いできたことを、光栄に思います。私の名前は、」

そこで彼女は、意味ありげに一息の間を取った。

「私に与えられた名は、ミヤコワスレ。約束の花です」

——花言葉は、「また会える日」。

彼女の髪に添えられている花である。微笑みを湛えて名乗ったミヤコワスレの真意を、舞は計りかねていた。

「急な訪問をお許してください。何分、予約というものがお互いに取りませんので」

応接室で向かい合う五人。紀伊が淹れた紅茶に一口を着け、ミヤコワスレはすぐに口を開いた。

「早急に、皆さんと直接、お話しする必要がありますでしたので」

「それで、わざわざここまで？」

「ええ。普段は奥まったところに待機してばかりで、少々退屈でして。いい暇潰しにもなりました」

そう言つて、ミヤコワスレは笑った。上品な、気品あふれる笑顔だ。「さて、それでは早速本題に。お互いに、あまり時間に余裕がある身ではないでしょうから」

もう一口紅茶に口づけたミヤコワスレが、カップを置いた。隣に控える巫女姿の少女もそれに倣う。それまでの和やかな雰囲気から一

転して、応接室に張り詰めた空気が満ちていく。

「『統制者』の計画に、狂いが生じました。計画遂行の最終段階で、貴女方に私たちの全容を教えるつもりでしたが、どうやらそれは叶いそうにありません」

「『統制者』、というと、人類側が鬼や姫と暫定呼称している、ハワイ沖の深海棲艦のことですか？彼女らが、貴女たちの遂行すべき計画を立案した、と？」

それではやはり、深海棲艦にとっての最重要拠点は、ハワイなのだろうか。

舞の問いかけに、ミヤコワスレはコテンと首を傾げる。やがて何かを納得したかのように、その表情をさらに和らげた。

「ああ、なるほど。そこから説明が必要ですね」

ミヤコワスレが指を二本立てる。

「ほとんどの『イレギュラー』が『統制者』と呼んでいる存在——人類が鬼や姫と呼称している存在は、真に『統制者』とは言えませんが、いわば彼女らは、仮初の指揮官。本当の『統制者』が与えた命令を、忠実に『執行者』に伝えていくだけ」

ミヤコワスレが立てた指、そのうちの中指が折られる。残ったのは人差し指の一本。

「本物の『統制者』のことを、私たちは『大いなる先駆者』と呼んでいるわ。その存在を知っているのは、私たちの中でもごく一部だけ。私とこのビオラぐらいですね」

隣に控えている巫女服の少女を、ミヤコワスレは紹介する。ビオラと呼ばれた少女は、軽く会釈をした。

「ああ、それと。最近はある娘たちもか。確か……貴女たちは、『ロスト・シップ』と呼んでいたかしら？彼女たちは、『大いなる先駆者』が、自らの耳目として、最近産み出した娘たちよ」

「……では、貴女たちの計画も、その『大いなる先駆者』が？」
「ええ」

ミヤコワスレが首肯する。

「詳しい内容までは話せませんが、『大いなる先駆者』と私たちの計

画は、貴女方『T・T独立艦隊』の目的とするところを邪魔するものではない。今のところは」

強調された「今のところは」のセリフに、舞は眉をひそめる。言いたいことはわかる。彼女たちの計画に生じた狂い。それを正すために、必要とあらば舞たちの活動を妨害することもありうるということ。

——それは、具体的にどうやって？

答えは一つしか思いつかなかった。

「大いなる先駆者」の構想を全て理解しているとは、私たちも自信を持って言うことはできません。私たちが知っていることは、「大いなる先駆者」が貴女方に一つの「鍵」を与えたということ。一つの鍵は、ある時二つに分かれたこと。そして「大いなる先駆者」は、二つの鍵が再び一つになることを望んでいるということだけです」

舞たちに構うことなく語られるミヤコワスレの言葉は、まるで謎かけだ。「鍵」とは何のことなのか。なぜ二つに分かれたのか。

「その、「鍵」を一つに戻すことと、私たちの活動を妨害することとは、どんな繋がりがあるの？」

「さあ、どうでしょう？」

はぐらかすように、ミヤコワスレは悪戯っぽい笑みを浮かべていた。答えるつもりはないらしい。

「大いなる先駆者」の計画に狂いが生じたのは、貴女方がトラック沖で取った行動によるものです」

「どういうこと？トラック沖での……コマツグミとの接触は、「大いなる先駆者」が望んだことでは？」

「正確には、私が望んだこと、ですね。私も知りたいたいのですよ、「大いなる先駆者」の正体を。ですから、貴女方の混乱に乗じて、彼女をトラック沖に向かわせました。「大いなる先駆者」も、それを黙認していてくれました」

そこに間を挟むようにした溜め息は、おそらくミヤコワスレが自身自身に向けて吐いたものだった。

「私にとって誤算だったのは、三つ。コマツグミが想像以上に好戦的

な性格だったこと。貴女方の指揮系統回復が予想以上に早く、想定よりも早いタイミングで接触を図ってきたこと。貴女方が、第三者に見つかってしまったこと」

「どうやらミヤコワスレは、半年よりもさらに長い間、コマツグミをトラック沖に留めるつもりだったらしい。おそらく彼女の性格では、耐えきれずに暴れ始めてしまうだろうと、舞は思った。」

「貴女方がトラック攻略戦に加わったことで、トラック諸島をめぐる戦いの決着は、私たちの予想よりも早いものとなるでしょう。現状では、その戦いに『大いなる先駆者』の覚醒が間に合うことはない。ですから私たちは早めるのです、計画を、『鍵』を一つにすることを」

「・・・『鍵』の向こうに、『大いなる先駆者』がいるから？」

「いいえ、少し違います。『鍵』が繋ぐのは、『大いなる先駆者』ではありません。それと対になるもの、とでもいいでしょうか。こちらには、私も直接お会いしたことはありません」

益々、彼女の意図はわからなくなった。計画の全容も、彼女たちがここを訪れた目的も。

「そこまで考えて、舞は気づく。」

「話を戻しましょう」

舞の視線にわずかに頬を吊り上げ、ミヤコワスレは軌道修正を図った。この話題について、これ以上話すことはないということだろうか。

「私の目的は、貴女方への報告でした」

「——やはり。」

情報交換でも、腹の探り合いでもない。彼女はただ、報告に来ただけ。

「ならば舞に求めるのも、同じものであろうか。」

「私たちは、与えるべきものを与えました。私たちの意志を示しました」

「その真っ直ぐな瞳が、舞を見つめた。深い蒼を湛えるその奥を、舞もまたジッと捉える。」

「貴女方の意志をお尋ねしたいのです。もう、ただの秘匿艦隊ではな

いでしよう？ 私たちとの接触という、不安定極まりない目的だけではないでしよう？」

挑戦的な言葉。それなのに、声音も、表情も、穏やかなままだった。舞は言葉を選ぶ。

「……ここに留まり続けることは、もう諦めてる」

紀伊と三瀬が、息を飲むのがわかった。当然だ。まだ誰にも話していない、舞だけが心の中で考えていたことだから。

大切な「家族」を守るために、その可能性を、慎重に探していることだから。

「時期も何も決めてないけど。私たちは、いつかここを出るよ。貴女たちを追って」

舞の最後の言葉にも、ミヤコワスレは何か言うわけでもなく、ただ満足げに、二、三度頷いた。

「及第点、といったところでしょうか。貴女方の意志は、私が満足し得るものです」

そう言つて笑つた後、ミヤコワスレは思わせぶりに人差し指を唇に当て、右目を瞑つた。

「ここまで話すつもりはありませんでしたが、おまけに。貴女方がここを出ていく口実になるかもしれませんよ」

手招きをするミヤコワスレに、舞は前傾姿勢となつた。その耳元に、ミヤコワスレは聞き取れるギリギリの、かすれるような声で囁いた。

舞は大きく目を見開く。離れていくミヤコワスレの顔を、マジマジと見つめる。しかし、彼女の変わらない微笑みから、何かを読み取ることはできなかつた。

とんでもない爆弾を、自らが手にしたことだけを、舞は悟らざるを得なかつた。

◇

艦艇データファイル12

「ジョーズ」

全長・・・一九〇・〇メートル

全幅・・・二〇・三メートル

排水量・・・一万五〇〇トン

速力・・・三二ノット

四七口径六インチ三連装砲六基

三八口径五インチ連装両用砲四基

四〇ミリ連装機銃四基

“モビー・ディック”に付き従う軽巡洋艦。操縦者はビオラ。砲撃能力を極端に重要視した軽巡洋艦であり、へ級 flagship の上位互換と言える。六秒に一発という驚異の斉射能力を持つ主砲は、その圧倒的速射能力を生かして戦艦すら撃破可能と言われており、特に水雷戦隊にとって非常に大きな脅威となり得る。